大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.81　　2023. 3. 1.

目次

門を叩け、さらば開かれん。 1
2022(令和4)年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧 2
2022(令和4)年度「指定研究」等研究目的紹介 4
2022(令和4)年度「一般研究」等研究組織一覧 11
2022(令和4)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介 16
2022(令和4)年度東京分室PD研究員個人研究 研究目的紹介 23
公開講演会・研究会開催報告 24
歓異抄ワークショップ開催報告 26
海外研究調査報告 30
彙報 32

門を叩け、さらば開かれん。

大谷大学真宗総合研究所東京分室　分室長　福島 栄寿

博士課程を終え、博士号を取得した若い研究者たちには、研究を継続し、さらにテーマを深めて展開していくための「場」が必要である。大谷大学においては、伝統的に総合研究室の助教が、その「場」としてあるが、2016年4月に、真宗総合研究所の東京分室が開設され、そこにPD研究員という「場」が、新設された。

PD研究員が、この東京分室を拠点にして成し得ることを三つ挙げてみたい。第一は、むろん自らの研究課題に集中して取組める。第二に、首都圏という多くの研究者が集う環境に身を置きつつ、人的交流が出来る。そして第三に、「田舎の学問より、京の昼寝」という諺に通じるように、東京という「場」が有する何かしらの“力”を感じながら学究生活を満喫出来る。この三点があるように思う。

思えば、大学院修士課程まで田舎で昼寝をしていた私は、運良く博士課程に進学出来た谷大で、有難くも学問の楽しさに気づかせていただいた。その当時寮監であった私に、学寮長で九州出身の武田武麿教授が、「『田舎の学問より、京の昼寝』とは言ったものだよ、福島君」と、しばしば語りかけて下さった。なるほど、京都市内では毎月のように学術大会や研究会が開催され、自転車で会場に出向けば、田舎時代の私には、著書や論文でしか名前を知らぬ大先生たちが、目の前に居られることが新鮮だった。SNSもない時代だ。市内の本屋には新刊書が溢れ、京大周辺の古本屋には掘り出し物があった。研究会では、問題関心を同じくする同世代の院生が集い、発表すれば先輩から厳しく叱咤激励されもした。修羅場だったが、その「場」に身を置くだけで、研究者の集う世界に新鮮な感動を味わった。また近隣大学の教員や院生に誘われ、日韓の宗教研究者の学術交流会にも幾度も参加した。交流の輪が広がり、己れの狭い世界が破られるのを実感した。思い出話は、若い人には、ご法度だとか。ご海容を賜りたい。

翻って、なぜ東京分室は、東京という「場」にあるのか。周知のように、東京分室は、都内でも、就中、初代学長・清沢満之が学んだ東京大学最寄りの本郷三丁目駅近くにある。清沢は、明治時代の首都東京に身を置きながら、多くの学友にも恵まれ、学問研究を修めた後、京都へと戻った。その後、清沢は、自らが学んだその東京という「場」に、宗門学徒の学場としての真宗大学設置を、強く願ったのである。そのような大学史を振り返る時、東京分室という「場」には、若き研究者たちが、百年の時を経て再点火された初代学長の志念(ともしび)に照らされ、各々に学究の道を歩むよう願われていることに思い至るのである。

明治30年代を生きた青年たちは、明治以降の立身出世主義の風潮に限界を感じ、煩悶の時代を生きていた。そして、首都東京という「場」は、その坩堝であった。そこは、百年前も今も、夢追い人たちが集い、切磋琢磨する「場」でもあるだろう。同時に、この国の何処よりも、その現在を、行く末を映し出し、課題を突きつける「場」でもある。果たして、その厳しい「場」に身を置く若き研究者たちは、多様な人・情報・モノ・出来事等と遭遇し、何を感じ、何を思索し、如何に表現、発信しようとするのか。否が応でも、若き研究者たちを鍛えないではおかないだろう。

2020年春からのコロナ禍で各PD研究員の研究活動は、必ずしも思い通りに取組めたわけではない。だがそれでも、京都の真宗総合研究所とも連携しながら、工夫を凝らしつつ、出来ることに取組んできた。東京分室開設から、7年を経過した。この間、この東京分室からは大学教員として活躍している一方、他研究機関の研究者やPDとして研究を継続している方々が、育っている。何より、このことが、この東京分室が「場」の力として、若い研究者を鍛え育む可能性を有している証左であろう。

「門を叩け、さらば開かれん」という聖書の言葉は、示唆的である。待っているだけでは、門は開かれることはなく、求めなければ、己れが欲するものは得られまい。首都東京の地で、研鑽し、力をつけて、更なるステップを歩み出さんと志す若き研究者たちよ。我こそはと、是非、東京分室の門を叩いて欲しい。

2022（令和４）年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧

【特定研究】

研　究　名	研究課題及び研究組織	
Ｅラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開	研究課題	eラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入
	研究代表者	一　楽　　真（学長・教授・真宗学）
	研　究　員	箕　浦　暁　雄（教授・仏教学）
		酒　井　恵　光（准教授・計算機科学）
		戸　次　顕　彰（講師・仏教学）
		本　明　義　樹（講師・真宗学）
	嘱託研究員	難　波　教　行（真宗大谷派教学研究所研究員）
		松　下　俊　英（真宗大谷派教学研究所助手）

【指定研究】

研　究　名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	井　上　尚　実
	研　究　員	井　上　尚　実（教授・真宗学）
		Dash Shobha Rani（教授・インド学・仏教学・貝葉写本研究・インドの古典芸能）
		松　浦　典　弘（教授・東洋史）
		箕　浦　暁　雄（教授・仏教学）
		松　川　　節（教授・人文情報学・東洋史学）
		アマ　ミチヒロ（准教授・アメリカの仏教（特に浄土真宗）／近代日本仏教と文学／国際日本学）
		Michael J. Conway（准教授・真宗学）
		新　田　智　通（准教授・仏教学（インド））
	嘱託研究員	James C. Dobbins（オバーリン大学名誉教授）
		Robert F. Rhodes（EB 誌編集長、本学名誉教授）
		下　田　正　弘（東京大学教授）
		Mark L. Blum（カリフォルニア大学バークレー校教授）
		John LoBreglio（EB 誌編集者、オックスフォード・ブルックス大学准教授）
		Wayne S, Yokoyama（元花園大学講師）
		羽　田　信　生（毎田周一センター所長）
		大　西　和　彦（ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員）
		三　鬼　丈　知（本学非常勤講師）
	研究補助員(RA)	千　葉　一　生（博士後期課程第３学年）
		Woo Jongin（博士後期課程第２学年）

西蔵文献研究	研究課題	チベット語文献のデータベース化
	研究代表者	三　宅　伸一郎
	研　究　員	三　宅　伸一郎（教授・チベット学）
		上　野　牧　生（准教授・仏教学）
		松　川　　節（教授・人文情報学・東洋史学）
	嘱託研究員	伴　　真一朗（2021年度西蔵文献研究嘱託研究員）
		U. エルデネバト（モンゴル国立大学教授）
清沢満之研究	研究課題	清沢満之の生涯と思想の研究－西方寺所蔵文献の研究－
	研究代表者	西　本　祐　攝
	研　究　員	西　本　祐　攝（准教授・真宗学）
		西　尾　浩　二（講師・西洋哲学）
	嘱託研究員	福　島　栄　寿（本学教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
		名　畑　直日児（真宗大谷派教学研究所研究員）
	研究補助員(RA)	山　雄　優　生（博士後期課程第2学年）
大谷大学所蔵仏教写本研究	研究課題	パーリ語貝葉写本の研究－保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心に－
	研究代表者	Dash Shobha Rani
	研　究　員	Dash Shobha Rani（教授・インド学・仏教学・貝葉写本研究・インドの古典芸能）
		新　田　智　通（准教授・仏教学（インド））
		戸　次　顕　彰（講師・仏教学）
	嘱託研究員	Suchada Srisetthaworakul（古典写本研究センター・センター長〈タイ･アユタヤ〉･マヒドン大学講師）
東京分室指定研究	研究課題	宗教と社会の関係をめぐる総合的研究－現代社会における宗教と共生－
	研究代表者	福　島　栄　寿
	研　究　員	福　島　栄　寿（東京分室長・教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
		荻　　翔　一（PD研究員・宗教社会学）
		陳　　宣　聿（PD研究員・宗教学）
		磯　部　美　紀（PD研究員・社会学）
		澤　﨑　瑞　央（PD研究員・仏教学）

【資料室】

名　　称	研究課題及び研究組織	
大谷大学史資料室	研究課題	大学史関係資料の収集・整理
	室　　長	藤　元　雅　文（研究所主事・准教授・真宗学）
デジタル・アーカイブ資料室	研究課題	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築
	室　　長	藤　元　雅　文（研究所主事・准教授・真宗学）
	嘱託研究員	川　端　泰　幸（博物館主事・准教授・日本中世史）

2022（令和 4）年度「指定研究」等研究目的紹介

特定研究

e ラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入

研究代表者・教授　一楽 真
（真宗学）

本研究の目的

大谷大学は開学以来、仏教および真宗の学びを一般社会へと広く公開していくことを理念として教育活動を展開してきた。近年の情報化社会に相応する形で、この理念をより積極的に展開するために、「E ラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開」研究班は立ち上げられた。本研究班の活動によって、これまで学習機会を得ることができなかった在宅の一般の方々はもちろん、京都の大谷大学に来訪することが困難な宗教関係者、さらには海外に居住する方など、より広い受講者を対象に仏教・真宗を学ぶ機会を提供することが可能となる。そのため本研究班では、特にインターネットを活用した仏教教育機会の提供システムを研究・開発し、実施することを目的としている。

活動内容

2020・2021 年度と継続して、E ラーニングの実施に必要なコンテンツ、システム、運用体制の確立を課題として取り組んできた。

コンテンツ面においては、全 9 回の構想のもと、釈尊の生涯と思想をテーマにした仏教入門講座の完成を目指した。その上で特に、仏教入門に適した『改訂 大乗の仏道－仏教概要－』（東本願寺出版、2016 年）および同『資料編』（同、2019 年）をもとに、コンテンツ開発に着手してきた。「仏教入門」については、以下のように全 9 回の講義を行う。

第 1 回　はじめに
第 2 回　仏教成立の時代背景
第 3 回　青年ゴータマの歩み
第 4 回　沙門となったゴータマ
第 5 回　苦の原因をたずねて
第 6 回　最初の説法
第 7 回　仏弟子の誕生
第 8 回　釈尊の入滅
第 9 回　おわりに

以上の全 9 回にそれぞれ担当者を配当し、講義原稿を作成して、それを全体研究会の俎上に載せ、内容について討議を重ねた。それを受けて原稿作成者である講義担当者は講義原稿を改訂し完成させていった。また、プレゼンテーションツールであるパワーポイントを活用し、有効な資料の視覚的提供の工夫にも着手した。写真や地図を持ち寄り、キーワードの提示や紹介する仏典の文章・言葉を検討し、資料として提示する準備を行い、それらを適宜、講義映像に取り込んでいく作業をすすめた。その上で、準備の整ったものから順次撮影を行ってきた。

2022 年度の研究目的と展望

2022 年度には、これまでに確立した撮影のアウトラインに沿って、全 9 回の撮影を終え、実運用開始に向けた体制を整える。

システム面においては、まず諸機関と連携し、既存プラットフォームを活用した「仏教入門」配信の実装を進める。試験的な実装結果の評価をもとに、プラットフォームの選定・改善を進めることで、実運用への対応を進める。また技術的な面だけでなく、実際の公開を想定し、広報や申し込み方法の確定、さらには、各回に設けられた Q&A の受信返信方法など、確認すべき点も多くあるが、これらも研究の一環として、検討していきたい。しかし、今後の大谷大学内での安定的運用については課題も多く、一研究班が継続して担うだけでは不十分であると思われる。今後は関係部署が協力連携して、特に適当と考えられる機関が母体となって、運用体制を構築していく必要がある。そのための有効な方途と、実運用開始に速やかに移行できる準備を進めていきたい。

「真宗入門」に関しては、仏教教育センターや真宗学科の教員が連携して、継続的に撮影から配信までを実施できるような体制を構築する必要がある。そのためにも本研究班で確立したコンテンツ開発、撮影方法、システム構築を基に、公開に向けた準備、討議を行う。その上で、「真宗入門」についての担当者を配当し、講義原稿の作成、写真・年表・宗祖の言葉の選定などを行い、準備が整ったものから順次撮影へと移行していきたい。

今後「仏教入門」や「真宗入門」の講座が、大谷大学の共通基礎科目である「人間学Ⅰ」の講義などで活用されることも期待される。以上のように、E ラーニングによる教育機会提供の体制を整えることは、今後の新しい教育システムの構築へと直結するものとなるであろう。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授　井上 尚実
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。2020年度以来新型コロナウイルスの感染拡大（COVID-19）によって国際的な研究活動は大きな影響を被ってきたが、状況は少しずつ改善しつつある。本年度は、欧米とアジアの言語文化圏を担当する二つの班を置き、それぞれ下記のようなテーマで、研究活動を進める。

研究テーマ

① 欧米班：「真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する」

② アジア班：〈中国〉「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院古代史研究所との共同研究。〈ベトナム〉『日本仏教概説』の出版。

活動内容

【欧米班】

① 国際学会への参加

・11月にアメリカ合衆国のコロラド州デンバーで開催されるアメリカ宗教学会（AAR）において、以下のようなEBS設立100周年記念のパネル発表を行う。

テーマ：「The Eastern Buddhist Society: Past and Future」（EBSの過去と未来）

パネリスト：日沖直子（南山大学研究員）、マイケル・コンウェイ研究員（EBS内部顧問）、マーク・ウンノ（オレゴン州立大学教授）、ジョン・ロブレグリオ嘱託研究員（EB誌編集者）。

・8月に韓国ソウルにて開催される国際仏教学会（IABS）にマイケル・コンウェイ研究員が参加して研究発表を行う。

② 翻訳研究

カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと合同で『歎異抄』のワークショップを実施する（夏に大谷大学、3月にバークレー）。新型コロナウイルスの感染拡大（COVID-19）によってワークショップが開催ができなかった分について、可能な範囲で遅れを回復できるように柔軟に対応していく。

・『*The Eastern Buddhist*』誌　Third Series Vol.2 No.1, No.2（2022）の発行業務および東方仏教徒協会の運営。

③ 国際シンポジウムの準備

2023年に本学において開催予定の「Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World's Religious Traditions（世界の諸宗教における悟りと智慧と変容）」をテーマとするシンポジウムの企画と準備を進める。このシンポジウムには、ハンガリーの学術交流協定校ELTEに加えて、キリスト教、イスラム教など仏教以外の諸宗教の研究者も招聘する予定で計画を進めている。

【アジア班】

〈中国〉2015年12月に開催した「中国古代史及び敦煌・トルファン文書研究」国際シンポジウムの成果として論文集を出版する。〈ベトナム〉『日本仏教概説』のベトナム語訳をベトナムにおいて出版する。

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

（1）専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化する

（2）重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開する

ことを目的としている。

上記目的を達成するために、本学図書館所蔵の以下のチベット語文献の電子テキスト化・デジタル画像化・校訂テキストと研究の公刊を行う。

（1）蔵外 11841『プトン仏教史』

本文献は、14 世紀チベットを代表する学者プトン=リンチェンドゥプにより著されたもので、インド・チベット仏教史およびチベット大蔵経成立史を研究する上での基本資料として詳細な研究がなされてきた。しかし、その第 1 章仏教概説の部分は、14 世紀チベットにおける仏教理解の一端を解明する上で必要不可欠な資料であるにもかかわらず、未だ詳細な研究はなされていない。その理由は、研究のための基本的な作業、すなわち校訂テキストや引用箇所の同定などがなされていなかったためである。この現状に鑑み、第 1 章仏教概説の部分について、本学所蔵のタシルンポ版（蔵外 11841）をはじめとした各種版本・写本を校訂したテキストを作成し、公刊することを目標とする。

（2）蔵外 13940『極楽に生まれるポワ（遷移）と犯戒還浄など』

本文献は、「ポワ（'pho ba 意識を身体から抜き取って、より高い次元へと移し替える行法）」による極楽往生とモンゴル国立大学との共同研究の成果刊行と、中国蔵学研究中心と、具体的な共同研究に向けた交流を行う。

いうチベットにおける浄土信仰の実態を知らせる、貴重な資料である。ウメー（草行書体）書体のテキストをウチェン（楷書体）書体に直し入力した上で校訂し、その校訂テキストを、研究、および写本の写真とともに公刊することを目標とする。

また、今後の研究・公開に向けて、過去に写真撮影した文献の画像データの確認・加工し PDF 化し整理・保管する。

以上のように本学所蔵の貴重／重要なチベット語文献の公開・研究を行うとともに、学術交流協定に基づくモンゴル国立大学との共同研究第 2 期（2016-2018 年度）の研究報告書の刊行や、イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史』の第 1 部「モンゴルの王統」（1 b 1-22 b 4）部分のチベット語版とモンゴル語版（デンマーク王立図書館写本及びウランバートル写本）の対照訳注の作成を行う。

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究
－西方寺所蔵文献の研究－

研究代表者・准教授　西本 祐攝
（真宗学）

本研究は1991年度に発足し、1993年度に、当時、研究代表を務めていた安冨信哉によって本学編『清沢満之全集』の刊行が提言されて以降、清沢満之の生涯と思想の研究、及びそれに関する文献の調査収集を行ってきた。その成果として『清沢満之全集』（全九巻、岩波書店、2002～3年、以下『全集』と略）を刊行した。さらに『全集』に収録されていない新たな文献群を『清沢満之全集』別巻Ⅰ・Ⅱ（岩波書店）として2019年度と2020年度に刊行した。

『全集』刊行に際しては、従来の無我山房『清沢全集』（全三巻）、有光社『清沢満之全集』（全六巻）、法藏館『清沢満之全集』（全八巻）には掲載されていない99文献を、『全集』別巻刊行に際しては、34文献を新たに収録するに至った。『全集』および『全集』別巻には清沢満之自坊の西方寺に所蔵されている日記、思索録、書簡、刊行物掲載論文等を依拠本として多くの文献を収録した。これは、1998年度から、西方寺の全面的な協力をいただき、当時の研究員と研究補助員、補助者が蔵書整理、文献調査、調査カードの作成、文献目録作成等を行い、写真撮影、内容精査等を地道に行ってきたことによる。

本研究では、西方寺所蔵清沢満之自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）の影印（36枚撮りフィルム248本分、総コマ数8500枚超）を所蔵しているが、『全集』及び、『全集』別巻、その他で公開済の文献はその3分の1程である。これは主に『全集』が清沢満之自身の著述を収録し清沢満之の受講ノートや書籍からの抜書、メモ、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。

未公開文献には、清沢満之の育英教校、帝国大学、真宗大学寮の頃から後年に至るまでの文献が含まれ、帝国大学時代については「真宗学」「仏教学」「歴史学」「哲学」「生物学」「儒学」「数学・化学」「心理学」等の受講ノートを確認できる。これらは「清沢満之の思想形成を探る資料としての価値」、関係教育機関で「どのような教育がなされたのかという近代日本教育史の資料」ともなるものである。本研究では、『全集』に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っており、2016年度終了時には全文献の翻刻を済ませ、一次校正に進んでいる。2018年度～2020年度は『全集』別巻の刊行に専注したため、西方寺所蔵文献の校正を中断した。

これらの未公開文献について研究を進めることは、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものである。執筆時期も分野も内容も多岐に及び、すべてを公開することは一朝一夕に実現可能なことではないが、貴重な清沢満之自筆文献の影印を預かる本研究が継続的になすべき研究であり、その内容精査とともに公開に向けた研究活動を継続している。

昨年度からは、具体的に、次の2点を柱として研究活動を行っている。

1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究
2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして36枚撮りフィルム167本分、総文字数3,703,420字である。その中には、清沢満之の生涯全般にわたる文献を確認することができるが、その全体については、未だ十分な精査ができているとは言い難い。その全てについて、分野、内容、執筆年代等の確認・整理・検討を行う必要があり、まずはその全貌について精査する研究を進め、全文献の年代、分野等を確定する文献リストの作成を開始し、3カ年での完成を目指す。これらの研究であきらかにした成果については、これまで同様に西方寺と情報共有を行っていく。また、清沢満之の著述について、未収集文献を調査・収集する活動も継続していく。

前年度は、計画通り、西方寺所蔵文献所蔵リストの作成を開始し、未公開分フィルム167本中、104本分について、基礎的な確認作業を行った。リスト作成に向けた文献確認とともに、各文献の執筆年次、種類、内容を踏まえた解題（書誌情報）を作成し、執筆年次が判明したものについては、清沢満之の年譜にプロットしていく作業を並行して行っている。

また、本研究が西方寺所蔵文献を調査して以来、作成してきた現状のデータでは、本研究が所蔵する各写真ごとに『全集』収録・未収録かについて整理されていない。そのため、これらを判別することができる詳細なデータの整理を並行して行い、フィルム82本分の確認作業を終えている。

2022年度は、残りの文献についての基礎的な確認作業を進める。これらは基礎的な作業であり、すべての文献について基礎作業を終えた後に、再度、それを踏まえた各文献についての個別の調査を行いつつ、『全集』未収録の全文献を確認していく必要がある。年時を確定することが困難と考えられるメモ、文字の練習等の記述もあるが、できるだけ確定作業を重ねていくことで、清沢満之の行実を明らかにしていく。

大谷大学所蔵仏教写本研究

パーリ語貝葉写本の研究 ー保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心にー

研究代表者・教授　Dash Shobha Rani
（仏教学）

真宗総合研究所の2022年度の新しい取り組みの一つとして、「大谷大学所蔵仏教写本研究」という指定研究班が新たに設置された。大谷大学には、パーリ語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その一部はある程度整理され、研究されているが、未整理で研究されていないものも多く残っている。

本研究は、主に三つの柱を立てて研究を行う。一つは、1985年に本学図書館から出版された『大谷大学図書館所蔵　貝葉写本目録』（以下、『貝葉写本目録』）に登録されているパーリ語貝葉写本を取り上げ、その保存、整理と利便性、そして学術研究の準備を整えることを主な目標とする。そのため、貝葉写本の高度なデジタル化、上記の『貝葉写本目録』のデータベース構築、写本が包まれていたと思われる包み布の研究、関連資料の収集、ローマ字転写テキストや校訂本の作成、翻訳などを中心に作業を行なう。また、そのために必要な資料を収集する。

二つ目は、写本とは単なる文字の集合体ではなく、それが作成された、または書写された地域・文化の様々な様相も含まれているため、写本の「総合的な研究」が求められる。そのため、本研究は、文献研究にとどまらず、写本研究に基づき、南アジア・東南アジアを中心にその文字、言語、文化、信仰などの国際的・学際的な研究を行うことを目的とする。加えて、仏教写本の特徴や性格をより明白に示すために、その他の対象写本と比較検討する。

三つ目は、写本研究を最新の情報に基づき行うため、関連資料収集、共同研究の実施および研究者・研究機関とのネットワーク構築を目指す。研究者のネットワークを築くとともに本研究の視野を広げる目的で、海外の研究機関との学術交流を図り、それら研究機関の所蔵資料をも活用し、人材の協力を得る。写本や関連文献の研究を踏まえ、諸国における仏教文化や仏教の現状について研究することが可能になり、多角的な視点から仏教の受容性や現代におけるその意義を明らかにする。学術交流の一環として、交流先の研究者と本班（必要に応じて、他の研究班も含む）の人材を生かして、共同研究・国際シンポジウムなどを開催し、その成果を出版物として公刊する。

研究活動及び成果の国際的な評価を目的として、海外の研究機関における研究活動紹介、成果発表会を定期的に行い、英語での出版を目指す。そして、本研究は写本中心ではあるが、仏教思想、仏教文化という拡大した領域に渡って研究を行うため、研究者のみならず、社会に還元する目的で、成果の一部について一般の社会人を対象に公開発表会も定期的に行う予定である。

この目的を達成するために、2022年度において以下の研究活動を予定している。

(1) 高度なデジタル化：貝葉写本の多角的な研究に役立つよう、本学所蔵貝葉写本の高度なデジタル化およびデジタル化された資料の保存と整理を行う。（20套予定）

(2) 包み布の研究調査：タイから贈られてきた貝葉写本が包まれていたと思われる包み布は現在63枚ある。コロナ禍の影響により中止になっていた本学所蔵貝葉写本の包み布の研究調査を再開する。

(3)『貝葉写本目録』のデジタル化：写本のデジタル化にとどまらずに、これらの貝葉写本の詳細を便利に使えるよう『貝葉写本目録』もデジタル化する。そのため、データ入力・校閲作業を継続して行う。

(4) ハイデルベルク大学との共同研究：写本研究の総合的で新たな研究及び技術・知見の集積を目的として、ドイツのハイデルベルク大学のDepartment of Cultural and Religious History of South Asiaと「Manuscriptology and Digital Humanities」（写本研究とデジタル人文学）という共同研究会のもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的に開催する。詳細については以下のURLを参考にしていただきたい。
https://www.sai.uni-heidelberg.de/krs/forschung/manuscriptology-and-digital-humanities.html

(5) ネットワーク構築：現在も宗教文化の一部として多くの写本を所蔵するタイとインドでの協力機関、研究協力者とのアカデミックネットワークを構築する。本学との学術協定が成立している教育研究機関の協力を得て、本研究班の研究目的の達成のため学術交流・共同研究を図る。

(6) ローマ字転写テキストの作成：『貝葉写本目録』の写本のローマ字転写を順次作成し、バリアントを示す。

(7) 資料収集：国内外の研究機関・所蔵機関より関連資料を収集する。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授　藤元 雅文
（真宗学）

本資料室の意義・目的は、大谷大学の公文書及び、大谷大学の歴史を知る上で必要な資料の収集・整理・保存である。大谷大学史に関連する資料、大谷大学図書館に保管されない大学発行物（各種パンフレットやノベルティなど）を収集・整理し、大学史資料として保管していく体制作りについても、中長期的な目的としている。このような取り組みにより、収集・整理してきた資料を通して大学の歴史を公開しつつ、建学の精神を再認識することにつなげていきたいと考えている。

上記の目的を達成するために、2022年度は以下の通り研究活動を推進する。

①「大学史研究」など過去の研究班から受け継いだ資料や寄贈された資料を専用の収納箱に入れ整理・保存する。また、他機関からの寄贈図書などの目録・住所録作成をおこなう。

②全国大学史資料協議会への参加をはじめ、他大学の大学史編纂室や公文書館など大学史に関係する組織と交流を図り、情報交換する。

③パンフレットやノベルティなど大谷大学図書館に保管されない大学発行物を資料として保管できる体制の整備へ向けた検討を行う。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長・准教授　藤元 雅文
（真宗学）

本資料室の目的は、大谷大学図書館所蔵古典籍等の貴重な学術資産のデジタル化を行うことによって、資料の保存と公開、そして学術研究への利便性を図ることである。

2022年度においては、大谷大学図書館所蔵古典籍に関して約1150冊の古典籍のデータベース構築を目標とする。従来、これらの古典籍のカタログは紙媒体のもののみが存在していたが、多くの研究者たちにこれらの古典籍の存在を伝え、研究に役立つようデータベースを構築している。本作業は2015年より継続中であり、現時点（2022年12月）では17,031冊の古典籍のデータベースが公開済みである。

上記の目的および目標に基づく研究活動を概括すると、下記のとおりとなる。

①大谷大学図書館古典籍のデータベース構築

②デジタル化された資料の保存と整理

③その他の大学所蔵各種データのデジタル化と整理・保存、及び公開に向けての検討

④本学が取り組むべき各種データのデジタル化と整理・保存、及び公開に向けての検討

2022年度においては、上記のとおり研究活動を推進する。

東京分室指定研究

宗教と社会の関係をめぐる総合的研究 －現代社会における宗教と共生－

研究代表者・教授　福島 栄寿
（近代日本仏教史／近代日本思想史）

研究の目的：この数年、人類が経験している新型ウィルス感染症の世界的流行は、現代日本社会の私たちの心や身体、生活スタイルにも、大きな影響を与えている。あまつさえ多様な価値観を内包する現代社会において、様々な変化を強いられているなか、宗教のあり方もまた問われている。当然ながら、現代社会において、宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も強まっている。そこで本研究は、宗教と社会との多種多様な関わり合いが見られる現代の東京・首都圏という場において、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことを目的とする。

研究の目標：人類にとって根本的な問いであり続ける、「どう生きるのか？」「どう死ぬのか？」という問題を主軸とし、宗教というフィルターを通して、社会に存在する、もしくは存在した様々な価値観の構造を明らかにすることを目指す。具体的なテーマとしては、生命倫理、道徳、性差、人権、秩序、死生観、メディア、政教分離、優生思想、多文化共生などを取り上げ、宗教との関係性を考察する。各年度に上記テーマに関連した研究会を開催することで当該問題に関する理解を深めるとともに、シンポジウムを開催して広く研究成果を大学の内外に向けて発信する。本年度は、サブテーマ「現代社会における宗教と共生」を設定し、「共生」を鍵概念に、私たちと宗教の多様な関係のあり方について考察し、宗教の役割を解明していく。

2022年度の研究計画：2022年度は「現代社会における宗教と共生」をサブテーマに設定し、特に「共生」という鍵概念を手がかりに、私たちと宗教の多様な関係を考察し、現代社会における宗教の役割を解明していく。各研究員の研究計画は以下の通りである。

荻研究員は、日本人キリスト者や日本のキリスト教団が在日コリアンの人権獲得運動に長年取り組んできたことに注目し、その経緯や活動上の特徴を明らかにする。それを通して、「多文化共生」という社会的課題に対する日本キリスト教界の役割を考察する。

陳研究員は、現代における胎児観の変容と宗教との関わりを検討し、特に日本と台湾を中心に「水子供養」と「プロライフ運動」の二つの側面から考察を行う。胎児の生命をめぐる葛藤が顕在化した現代社会において、宗教の役割と多様なる価値観共生について模索する。

磯部研究員は、首都圏の葬送儀礼を事例に、現代日本の葬送儀礼に僧侶が介在する意味を、僧侶・葬祭業者・遺族がそれぞれどのように見出しているのかを明らかにする。これにより、葬送儀礼に宗教的要素が取り込まれることで、生者と死者の「共生」はどのように図られているのかを考察する。

澤﨑研究員は、仏教文献に示される仏教徒の目指すべき生き方を通して、社会における宗教の役割並びに人生における価値観の問い直しを研究目的とする。特に修道過程上の目標であった「不退転」の概念内容に焦点を当て、東アジアにおいて全ての人々とともに歩むという大乗仏教の理想的人間像がどのように受容されたかを考察する。

福島研究員は、研究全体のとりまとめを行うとともに、現代社会における宗教の役割について「共生」を鍵概念に考察する。具体的には、現代沖縄における宗教事情をテーマに取り上げる。実際に、現地の宗教関連施設を訪れ、関係者へのインタビュー調査を実施し、浄土真宗・キリスト教等の諸宗教と伝統宗教との「共生」のあり方に着目して考察する。

2022（令和 4）年度「一般研究」等研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（江森班） 【2020～2024年度「科研費」採択】	研 究 課 題	健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知－非認知能力の測定
	研究代表者	江　森　英　世
	研　究　員	江　森　英　世（教授・数学教育学）
	協同研究員	竹　村　景　生（天理大学教授）
一般研究（井上班） 【2020～2022年度「科研費」採択】	研 究 課 題	支援が必要な子どもと親のための光・音・匂い環境を用いた『親子の遊び空間』の開発
	研究代表者	井　上　和　久
	研　究　員	井　上　和　久（教授・特別支援教育）
	協同研究員	大久保　圭　子（大和大学教授）
一般研究（木越班） 【2021～2023年度「科研費」採択】	研 究 課 題	人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究
	研究代表者	木　越　　康
	研　究　員	木　越　　康（教授・真宗学） 東　舘　紹　見（教授・日本仏教史学） 藤　枝　　真（教授・宗教学・哲学） 徳　田　　剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学） 藤　元　雅　文（准教授・真宗学） 野　村　　実（講師・モビリティ／まちづくり／地域交通政策／コミュニティ）
	協同研究員	斉　藤　仙　邦（東北福祉大学教授） 萩　野　寛　雄（東北福祉大学教授） 阿　部　友　香（佐久大学人間福祉学部講師） 本　林　靖　久（本学非常勤講師・特別研究員） 磯　部　美　紀（東京分室 PD 研究員・社会学）
一般研究（福島班②） 【2022～2024年度「科研費」採択】	研 究 課 題	九州沖縄仏教史・真宗史に関する基礎的研究－新出資料・布教ネットワーク・潜伏宗教－
	研究代表者	福　島　栄　寿
	研　究　員	福　島　栄　寿（教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
	協同研究員	知　名　定　寛（神戸女子大学名誉教授） 川　邉　雄　大（日本文化大学専任講師） 長　谷　　暢（真宗大谷派沖縄別院職員・法政大学沖縄文化研究所国内研究員） 松　金　直　美（真宗大谷派教学研究所研究員）
一般研究（佐藤班） 【2022～2026年度「科研費」採択】	研 究 課 題	勧修寺資料からみた文庫の形成・維持に関する総合的研究－新たな寺院文化論として－
	研究代表者	佐　藤　愛　弓
	研　究　員	佐　藤　愛　弓（准教授・仏教文学）
	協同研究員	上　島　　享（京都大学大学院教授） 藤　原　重　雄（東京大学史料編纂所准教授） 三　好　俊　徳（佛教大学准教授）

【共同研究】繰越による活動継続・補助事業期間延長

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（鈴木班①） 【2017～2020年度「科研費」採択】 ※繰越による活動継続	研究課題	変動帯の文化地質学
	研究代表者	鈴　木　寿　志
	研　究　員	鈴　木　寿　志（教授・文化地質学）
		廣　川　智　貴（教授・ドイツ文学）
	協同研究員	清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（武田班②） 【2018～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題	歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の多様性構築に向けた学際的研究
	研究代表者	武　田　和　哉
	研　究　員	武　田　和　哉（教授・歴史学・考古学・人文社会情報学）
		三　宅　伸一郎（教授・チベット学）
	協同研究員	鳥　山　欽　哉（東北大学大学院教授）
		矢　野　健太郎（明治大学大学院教授）
		横　内　裕　人（京都府立大学教授）
		吉　川　真　司（京都大学大学院教授）
		渡　辺　正　夫（東北大学大学院教授）
		江　川　式　部（國學院大學准教授）
		等々力　政　彦（埼玉県立自然の博物館任期制学芸員）
		佐　藤　雅　志（東北大学大学院学術研究員）
		清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
		水　谷　友　紀（京都府立大学非常勤講師）
一般研究（福島班①） 【2018～2020年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題	新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究
	研究代表者	福　島　栄　寿
	研　究　員	福　島　栄　寿（教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
	協同研究員	知　名　定　寛（神戸女子大学名誉教授）
		長　谷　　暢（真宗大谷派沖縄別院職員・法政大学沖縄文化研究所国内研究員）
		川　邉　雄　大（日本文化大学専任講師）
		松　金　直　美（真宗大谷派教学研究所研究員）
一般研究（松川班①） 【2019～2021年度「科研費」採択】 ※繰越による活動継続	研究課題	モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究
	研究代表者	松　川　　節
	研　究　員	松　川　　節（教授・人文情報学・東洋史学）
		三　宅　伸一郎（教授・チベット学）
	協同研究員	小　野　　浩（元京都橘大学教授）
	研究協力員(支援)	ARILDII BURMAA（2021 年度松川班研究協力員（支援））
一般研究（コンウェイ班） 【2019～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題	中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究
	研究代表者	Michael J. Conway
	研　究　員	Michael J. Conway（准教授・真宗学）
	協同研究員	大　西　磨希子（佛教大学教授）
		齋　藤　隆　信（佛教大学教授）
		宮　井　里　佳（埼玉工業大学教授）
	研究協力員(支援)	三　池　大　地（2021 年度コンウェイ班研究協力員（支援））

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（髙橋班） 【2019～2023年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	キンギョから見る知覚統合の進化的基盤 髙　橋　　真（准教授・比較認知科学）
一般研究（田中班） 【2019～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望 田　中　正　隆（准教授・社会学）
一般研究（中野班） 【2019～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究 中　野　加奈子（准教授・社会福祉学）
一般研究（上原班） 【2019～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	『四六文章図』研究－日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐって－ 上　原　尉　暢（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（井黒班） 【2020～2024年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	アフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域の水利権に関する比較史研究 井　黒　　忍（准教授・東洋史）
一般研究（大原班） 【2020～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	新たなソーシャルサポートとしての〈よりそう支援〉のモデル化に関する研究 大　原　ゆ　い（准教授・社会学）
一般研究（鄭班） 【2020～2023年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	戦後日本の国際法学者による朝鮮問題の法理論争 鄭　　祐　宗（准教授・近現代朝鮮日本の政治社会史／国際法・国際政治史／等しく生きる自由）
一般研究（野村班） 【2020～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	中山間地域のモビリティ確保策に関する比較研究 野　村　　実（講師・モビリティ／まちづくり／地域交通政策／コミュニティ）
一般研究（中西班） 【2020～2023年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	南インドの仏教受容に関する図像学的研究：カナガナハッリ大塔を手掛かりに 中　西　麻一子（任期制助教・仏教学（インド）・仏教美術史（インド）・特別研究員）
一般研究（狭間班） 【2020～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	維新期における東本願寺の破邪論とキリシタン－樋口龍温の未公開史料の分析と公開－ 狭　間　芳　樹（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（本林班） 【2020～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	真宗地域における葬墓制と他界観に関する民俗学的研究 本　林　靖　久（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（山本班） 【2020～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	戦国期の誓約をめぐる社会史的思想史的研究 山　本　春　奈（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（西村班） 【2020～2022年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	地方社会の解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の展開と課題 西　村　雄　郎（特別研究員）
一般研究（阿部班） 【2021～2024年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	集合的なニーズ・権利に関わるグローバルな正義の比較社会学的研究 阿　部　利　洋（教授・社会学）
一般研究（喜多班） 【2021～2023年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	植民地前後における日朝間美術交流について 喜　多　恵美子（教授・韓国朝鮮美術）
一般研究（川端班） 【2021～2023年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	南丹地域の歴史史料を活用した地域文化の発信と継承に関する研究 川　端　泰　幸（准教授・日本中世史）

一般研究（前田班） 【2021～2022年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	19世紀末～20世紀初頭ドイツ帝国海軍におけるコマンド・テクノロジーの実態の解明 前　田　充　洋（講師・近代ドイツ史／日独関係史／ドイツ企業史／広義の軍事史）
一般研究（許班） 【2021～2022年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	国際移民のホームランド維持に関する研究：中国朝鮮族移民による母村への遠隔地参加 許　　燕　華（任期制助教・社会学／東アジア地域研究・特別研究員）
一般研究（平田班） 【2021～2024年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	日本人学習者のための韓国語発音教案開発－語頭平音の音響音声学的考察を中心に－ 平　田　絵　未（任期制助教・韓国語韓国文学・言語学・特別研究員）
一般研究（濱野班） 【2021～2023年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	中国近世における儒・仏・道三教の死者儀礼と明朝宗教政策との関連について 濱　野　亮　介（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（高橋班） 【2021～2023年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	9～13世紀の北アジア諸民族国家における多民族共生社会成立の歴史考古学的総合研究 高　橋　学　而（特別研究員）
一般研究（寺川班） 【2022～2024年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	フランス人格主義を基点とした「人格の完成」の再検討－道徳教育との関連もふまえて－ 寺　川　直　樹（講師・教育学）
一般研究（荻班） 【2022～2026年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	現代における在日コリアンのキリスト教信仰に関する研究 荻　　翔　一（PD研究員・宗教社会学・特別研究員）
一般研究（清水班②） 【2022～2024年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	タイ国で発展した積徳行文献に基づく蔵外仏典の研究 清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（平田班） 【2022～2023年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	イェルムスレウ言語論からみた20世紀後半フランス思想の研究 平　田　公　威（任期制助教・20世紀フランス哲学／一般言語学／ジル・ドゥルーズ・特別研究員）
一般研究（古川班） 【2022～2023年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	日系オーストラリア文学の可能性を考察する－第二次世界大戦時強制収容体験を中心に 古　川　拓　磨（任期制助教・英語文学／人種／宗教・特別研究員）
一般研究（鈴木真班） 【2022～2023年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	「説得」をめぐるパスカルの思想と方法の総合的研究 鈴　木　真太朗（任期制助教・パスカルを中心とする17世紀フランス思想／フランス語圏文化／外国語教授法・特別研究員）
一般研究（磯部班） 【2022～2023年度「科研費」採択】	研 究 課 題 研究代表者	個人化社会の葬儀における僧侶介在に関する宗教社会学的研究－法話に注目して－ 磯　部　美　紀（PD研究員・社会学・特別研究員）
一般研究（脇中班） 【予備研究】	研 究 課 題 研究代表者	乳児の物の受け取り動作の成立過程を共同注意の枠組みから解明する関係論的発達研究 脇　中　　洋（教授・発達心理学／法心理学）

【個人研究】繰越による活動継続・補助事業期間延長

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（池永班） 【2017～2019年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究 池　永　真　義（准教授・美術教育学）
一般研究（上野班） 【2017～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	世親作『釈軌論』の総合的研究 上　野　牧　生（准教授・仏教学）
一般研究（翁班） 【2017～2019年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開－「主体」論を超えて 翁　　和　美（特別研究員）
一般研究（清水班） 【2017～2020年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明 清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（渡邊班） 【2017～2020年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明 渡　邊　温　子（特別研究員）
一般研究（西川班） 【2018～2020年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響 西　川　幸　余（准教授・英語教育／英米文化）
一般研究（岡部班） 【2018～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の実態及び有効性の検討 岡　部　　茜（講師・社会学・社会福祉学）
一般研究（スミザース班） 【2019～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English Ryan W. Smithers（准教授・外国語教育・言語学・英米文化）
一般研究（徳田班） 【2019～2021年度「科研費」採択】 ※繰越による活動継続	研究課題 研究代表者	日本の地方部における多文化化対応とローカルガバナンスに関する地域比較研究 徳　田　　剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学）
一般研究（陳班） 【2020～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	現代宗教と胎児生命観の変容：日本と台湾の「プロライフ運動」を通して 陳　　宣　聿（PD研究員・宗教学・特別研究員）

【PD 個人研究】

個人研究（荻班）	研究課題 研究代表者	現代における在日コリアンのキリスト教信仰の研究－1960年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して－ 荻　　翔　一（PD研究員・宗教社会学）
個人研究（陳班）	研究課題 研究代表者	現代社会における宗教と胎児生命観の研究 陳　　宣　聿（PD研究員・宗教学）
個人研究（磯部班）	研究課題 研究代表者	現代日本における葬送儀礼と僧侶に関する研究－首都圏の事例を中心に－ 磯　部　美　紀（PD研究員・社会学）
個人研究（澤﨑班）	研究課題 研究代表者	中国仏教における不退転の概念内容の解明 澤　﨑　瑞　央（PD研究員・仏教学）

2022（令和 4）年度「一般研究」（新規採択課題）研究目的紹介

共同研究

九州沖縄仏教史・真宗史に関する研究
ー布教ネットワークの分析と潜伏関係の関係からー

研究代表者・教授　福島 栄寿
（近代日本仏教史／近代日本思想史）

沖縄仏教史の歩みは、日本本土の仏教史とは異なる。仏教は 13 世紀に伝来し、近世には琉球王国の王家が受容したが民衆に浸透しなかった。他方、浄土真宗は、琉球では近世初めに征服した薩摩藩の影響で禁教であったが、隠れ念仏者を介して那覇の辻遊廓の娼妓等に密かに浸透した。1877（明治 10）年 10 月、信徒増を懸念した琉球藩は 369 名の真宗信徒を捕縛した（以下、「第三次真宗法難事件」）。しかし、この「第三次真宗法難事件」の実態は不明な点が多い。

近年、高まる近代仏教史研究の関心の下で研究成果が多く生まれているが、資料不足のため特に近代以降の琉球・沖縄仏教史の研究蓄積は不充分である。本研究の目的は、仏教史・真宗史研究分野で長く見過ごされてきたこの近代以降はむろん、幕末近世期を含めた琉球・沖縄仏教史の総合的解明である。すなわち、研究代表者が、基盤研究（C）（JP18K00088　研究代表者：福島栄寿　2018～2022 年度）「新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究」）で取り組んできた研究の成果と、この間培われた人的弊がりや連絡網を支えに、幕末近世期以降の動向をも視野に入れながら近代以降の浄土真宗の布教と展開に着目した琉球・沖縄仏教史の実態解明を行う。

特に本研究では、九州地域と琉球・沖縄、及び清国を結んだ咸宜園を起点とする布教僧のネットワークの分析を方法的視座とし、近世期から現代までの総合的な沖縄仏教史・真宗史像を解明したい。そのため、潜伏キリシタンと寺院の関係、戦前沖縄の説教所跡、ハワイへ渡海した沖縄布教僧、そして沖縄の真宗と伝統宗教の融合等の実態解明が重要な鍵となる。

本研究の取組みは、沖縄仏教史の展開の解明に新たな知見をもたらし、日本本土と琉球・沖縄の交流史の実態の解明につながる。さらに言えば、本研究の成果は、政府（東京）や本山（京都）中心の日本仏教・宗教史像に対し、九州・沖縄からの視点を組込むことにより、日本宗教史像全体の見直しとその再構築に結びつくと確信するものである。

共同研究

勧修寺資料からみた文庫の形成・維持に関する総合的研究
ー新たな寺院文化論としてー

研究代表者・准教授　佐藤 愛弓
（仏教文学）

京都市山科区にある勧修寺は真言宗山階派の大本山であり、多くの文書・聖教を所蔵している。本研究の代表者・研究員はすでに 20 年ほど勧修寺資料の悉皆調査に従事しており、その成果もあって、2018 年に勧修寺中世文書が、2020 年に勧修寺聖教が重要文化財指定を受けるに至った。本研究は、勧修寺文書・聖教悉皆目録の点検と公開、そしてその構造的分析を基盤として、知の集積であるテクスト群がどのような論理で成り立っていくのかを考えることを目的とする。いわばこれまでの重文指定目録作成という作業的な要素の強い調査活動から、それを基にした論理的な分析へと研究の重点を変え、さらなる発展を目指すものである。それゆえ、寺院資料だけでなく、広く国内外のテクスト群が、いかなる場でいかなる論理で生成していったのかもあわせて検討していく。

上記の目的を遂行するために、以下のような活動を行う。

① 勧修寺資料が寄託されている京都大学総合博物館において、年に 3 回ほどの勧修寺資料調査を行う。（悉皆目録の点検を進めつつ、資料を実見し、そのカテゴライズや作成・収集・修補の過程を調査する）

② 大谷大学において、年 2 回ゲストスピーカーを招聘し研究会を行う。（広くテクスト群が成立する過程を検証するため、和歌や能楽などの諸芸道における注釈活動や、外国の教会・寺院における資料群の紹介など、代表者・研究員の専門外のゲストスピーカーから専門知識の提供を受けることとする）

以上のように、①勧修寺資料の構造分析を進めつつ、②国内外のテクスト群形成のケースを参照し、これらを統合して資料群の形成・管理をめぐる人々の文化的活動についての議論を重ねることによって、文庫を中心とした新たな寺院文化論の構築を目指すものである。

個人研究

戦後日本の国際法学者による朝鮮問題の法理論争

研究代表者・准教授　鄭 祐宗
（歴史学）

本研究は1950年代日本の国際法学分野において展開された朝鮮問題に関わる法理論争を主題とし、法学的朝鮮戦争基礎研究と国際法思想史研究との接合を試みるものである。1950年代国際法学者は朝鮮問題をいかなる国際法の法理に基づいて論じたかという問いから出発し、その理論的争点を捉える手続きとして、1940年代および1950年代における主権と国際平和機構をめぐる国際法学理論を検討し、他方において1930年代満州問題に関わる日本の国際法学者の研究実践を辿りながら、1950年代朝鮮問題に関わる当該法理論争を明らかにする。概して本研究は国際法学者と国際法学理論に関する歴史研究として位置づけられるものである。

本研究では、実定国際法研究の面からは、現代国際法が国連を通じた集団安全保障を前提としていること、実際にその例外規定と欠陥をいかなるものと把握するかによって、朝鮮問題に対する認識枠組みが異ならざるを得ないことを議論の前提として設定し、1950年代国際法学・国際機構法研究の系譜を立体的に明らかにしつつ、国際法思想史研究の面からは、反法実証主義の系譜に照準した戦間期国際法思想史についての先行する諸研究を戦後に引き継ぎ、当該歴史研究を発展させることが企図されている。本研究では、その照準する戦後日本の国際法学者として、横田喜三郎、入江啓四郎、田岡良一、田畑茂二郎、山手治之の諸氏を据え、諸外国での論争状況と戦後日本のそれとの類似性と差異への分析を試みつつ、戦後中国の国際法学者顧維鈞、梁鋆立の諸研究までを議論対象と設定する。

個人研究

フランス人格主義を基点とした「人格の完成」の再検討－道徳教育との関連もふまえて－

研究代表者・講師　寺川 直樹
（教育学）

日本の教育目的は、「人格の完成」（教育基本法第一条）とされている。この人格という訳語および「人格の完成」という表現には、カント哲学の影響があることが指摘されている。しかし、18世紀の哲学者カントは、ニヒリズムという現代の危機的状況を経験していない。また、ニヒリズムは、厳密にはヨーロッパ的な歴史的現実であるが、西谷啓治が指摘しているように、現代日本もニヒリズム的状況にあると言える。したがって、現代日本に生きるわれわれは、カント哲学をふまえつつ、ニヒリズム以降の思索をもとに「人格の完成」という教育目的を再検討する必要がある。それはとりわけ、その中核をなす道徳教育において重要な課題となる。にもかかわらず、以上の観点をふまえた教育学・道徳教育の研究は僅少であり、その内容についても十分に検討されてきたとは言えない。

そこで、本研究は、①フランス人格主義（ムーニエ、Th. シャルダン）およびその源流にあたるベルジャーエフの人格概念を考察し、②それらにもとづいて「人格の完成」という教育目的の本来的意義を明らかにするとともに、③道徳教育においてそれを体現するための一視座を提供することを目指す。具体的には、フランス人格主義およびベルジャーエフの思索をもとに、「特別の教科　道徳」で扱う内容項目の4視点（「A　主として自分自身に関すること」「B　主として人との関わりに関すること」「C　主として集団や社会との関わりに関すること」「D　主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」）と関連づけながら、①人格と自由との関係、②人格と他者・共同体との関係、③人格と自然・宗教的なものとの関係、を教育哲学・道徳教育の視点から明らかにする。

振り返るに、これまで18世紀の思想家ヘルダーの人間性形成思想について研究してきたが、ヘルダーもカントと同様、ニヒリズムを体験していない。こうした問題意識から、ヘルダーの人間性形成思想と親和性を有するニヒリズム以降の思想家として、ベルジャーエフ、さらには彼を源流とするフランス人格主義に着目し、彼らの思索を教育哲学（人間形成論）・道徳教育の立場から検討していく所存である。

個人研究

19 世紀末～20 世紀初頭ドイツ帝国海軍におけるコマンド・テクノロジーの実態の解明

研究代表者・講師　前田 充洋
（歴史学）

ドイツ帝国（1871 年～1918 年）は、一連の「統一戦争」（デンマーク戦争、普墺戦争、独仏戦争）をプロイセンが陸軍主導で勝利したことによって創建された。一方海軍は、1848 年のシュレースヴィヒ・ホルシュタイン戦争以降、その「弱さ」の克服が課題とされてきた。帝国創建を機にドイツ帝国初代皇帝ヴィルヘルム一世は、海軍増強に着手し、機構、艦隊、軍備予算の再編を目指した。これ以降ドイツ帝国海軍の増強は、第一次世界大戦前におけるドイツ帝国の外交、社会、経済をめぐる政策の中で重要なトピックとなっていく。

それゆえに従来のドイツ帝国政治史、社会経済史研究においても海軍軍備は重要な論点と目されてきた。なかでもドイツ帝国海軍が 1880 年代から第一次世界大戦前をつうじて展開した、民間企業から艦艇建造品を提供させる際に用いた手法であるコマンド・テクノロジーは、その手法ゆえに軍（海軍）・産（工業企業）の関係をみるための重要なポイントとして着目されてきた。しかしその一方で、コマンド・テクノロジーの運用実態については、史料を用いた細緻な分析にまで及んでいない。

そこで本研究では、コマンド・テクノロジーにかかわった、ドイツ帝国海軍・企業・王立シャルロッテンブルク工科大学（現ベルリン工科大学）が残した報告書や調査記録を紐解き、コマンド・テクノロジーの運用実態を実証的に解明することを目的に設定した。

これにより、同時代の軍・産・学の三者関係を浮き彫りにし、それとともに、第一次世界大戦時の戦時経済との研究をつなぐ結節点、ならびに近現代ドイツにおける軍産学複合体の連続／非連続性を考察する際の始点を形成することを目指している。

個人研究

「説得」をめぐるパスカルの思想と方法の総合的研究

研究代表者・任期制助教　鈴木 真太朗
（フランス文学・思想／フランス語圏文化／外国語教育）

ブレーズ・パスカル（1623-1662）は晩年、キリスト教に懐疑の眼差しを向ける不信仰者を仮想的読者として、キリスト教真理を証明し、あわよくば信仰へ導くことを目的とする著作を準備していた。遺稿を基に近親者が編纂し、刊行したのが『パンセ』（1670）である。書物の性格ゆえに同書は、未完の『キリスト教護教論』として知られる。ところが、その論証方法は神学的議論一辺倒の従来的キリスト教護教論と大きく異なる。

「説得」に関するパスカルの思想と方法を考察する上で、『パンセ』と同時期に執筆された『プロヴァンシャル書簡』（1656～1657）は注目に値する。『書簡』におけるパスカルの卓越した文体、またその後世文学への影響は広く知られている。こうした事実にもかかわらず、両者は個別的に論じられるのが常であり、『書簡』と『パンセ』との間にいかなる思想・方法的（非）連続性があるのかについては必ずしも判明ではない。

そこで本研究は、パスカルの思想と方法の諸相を解明するには、1）パスカルはモンテーニュから何を受容し、何に反発したのかという問いと、2）同時代の神学者（たとえばボシュエ）の説教とパスカルのそれとではどこにどのような違いがあり、どこからその違いが生じているのかという問いについて考察し、統一的な説明を提示すること、そして、「説得」をめぐるパスカルの思想と方法の独創をフランス 17 世紀キリスト教思想史のなかで再評価することを目指す。

研究の諸成果については、将来書籍化するという目標を念頭に置きつつ、国内の学会・学術雑誌はもとより、フランス（語圏）の学会・学術雑誌にて積極的に発信していく。

個人研究

イェルムスレウ言語論からみた20世紀後半フランス思想の研究

研究代表者・任期制助教　平田 公威
（西洋哲学）

本研究の目的は、言語学者ルイ・イェルムスレウ（1899-1965）が、二十世紀後半のフランス哲学・思想界でどのように受容されたのかを検討し、それにより形成された思想の意義と内実を解明することにある。

広く知られる通り、二十世紀のフランスでは、F. d. ソシュールに端を発する構造言語学が哲学・思想界にも影響力を有しており、構造主義思想を準備するに至った。この、言語学と哲学・思想の影響関係は、国内外の多くの研究者からの注目を集めてきており、現在でもソシュールらの構造言語学の思想的意義を検討する研究が行われている。

その一方で、ソシュールを批判的に継承しながら独自の言語論を構築したイェルムスレウの思想的意義はほとんど検討されてこなかった。これには、イェルムスレウ言語論の高度な専門性と抽象性が起因していると考えられるのだが、かれの理論が1960年代から1980年代の哲学者・思想家によって繰り返し参照されてきた事実に鑑みれば、その思想的な意義は疑いえない。図式的に整理すれば、イェルムスレウの言語論は、一方では、（A）構造言語学の延長線上で理解され、他方では、（B）非構造主義的な理論として理解されており、前者の理解のもとで、（a-1）その言語論を肯定的に参照する思想（R. バルトら）と、（a-2）批判的に参照する思想（J. デリダら）が現れており、後者の理解のもとで、（b）非構造主義的な思想の源泉として援用する思想（G. ドゥルーズと F. ガタリら）が現れている。いわば、イェルムスレウの言語論は、構造主義以降のフランス哲学・思想にとっての分水嶺とみなすことができるのである。

本研究では、こうした研究状況と事実関係を踏まえ、イェルムスレウ言語論を試金石にすることで、二十世紀後半のフランス哲学・思想の特異性と意義を体系的に解明する。より具体的に言えば、（1）二十世紀後半のフランス哲学・思想における、言語学という磁場を再検討しつつ、（2）構造主義思想との連続性において、反構造主義的思想と非構造主義的思想の意義を評価し、（3）それらの思想が提示する言語論および記号論の内実を解明する。

個人研究

日系オーストラリア文学の可能性を考察する－第二次世界大戦時強制収容体験を中心に

研究代表者・任期制助教　古川 拓磨
（アジア系（特に日系）アメリカ文学）

研究蓄積の多い北米日系人文学研究と比較して、歴史的に近しい軌跡を有するオーストラリア日系人文学研究（以降オーストラリアを「豪」ないし「豪州」と記す）は未だ欠落している。本研究の主たる目的は、豪文学史上、またアジア系英語文学研究においても看過されている当領域を、特に第二次世界大戦時の強制収容体験の言説に焦点を当てつつ、一連の日系人文学の俎上に載せることである。

日系人と第二次世界大戦中の強制収容体験は不可分である。豪州の場合、北米と比較して小規模ながらも周辺地域から様々な背景を有する「日系人」（オランダ領インド諸島、ニューカレドニア、日本植民地下の台湾や朝鮮半島出身者などを含む）が拘留された。この収容所構成の人種・民族、言語的な複雑さに加え、彼らの豪州内での分散や、終戦後日本へ「帰国」する者が多かったために、その文学的素地が未発達に留まったと考えられる。

ところが近年 *My Beautiful Enemy*（Cory Taylor, 2013）、*After Darkness*（Christine Piper, 2014）といった第二次世界大戦時の豪州内日系人強制収容体験を描いた小説が、若手作家たちにより発表され注目を集めている。これらの作品に見られる、社会階級・ジェンダー・民族の交差的影響に着目し、インターセクショナルな観点から分析することで、従来の被害者／加害者といった境界にとらわれない日系人強制収容言説を炙り出すことができよう。併せて豪州の戦争博物館などで歴史的資料を調査し、強制収容所の実態調査、豪州各地域との比較、及び作品との照査を行う。これらから、アジア太平洋地域に位置する豪州で、日本がより直接的な脅威とみなされていたと想定される状況下を描く作品には、北米と比較していかような差異が生まれ、どのような効果をもたらすのか検討する。

地域、世代、人種・民族を超越して共有される豪州日系強制収容の物語の展開を明らかにする試みは、決して一元化しえない多様な日系人の記憶の再考を促すと同時に、その豊かな文学的可能性を明らかにしうる。さらに強制収容を産出した社会背景や制度への批判的解釈へと還元することが期待できる。

個人研究

タイ国で発展した積徳行文献に基づく蔵外仏典の研究

研究代表者・特別研究員　清水 洋平

東南アジア大陸部各地に根付いた積徳行は、功徳の観念も含め地域あるいは民族により多様性があり、その習俗的な実践の在り方に注目し地域の文化的特徴を捉えようとする研究が社会学・歴史学の研究者を中心に行われている。一方、仏教学者は功徳観念の研究を中心としており、仏教文献を精査することを通して、功徳を積む在家者の実践（現実の姿＝現実相）と、パーリ正典上の教義から見た積徳行の意義・解釈の間には乖離があり、これらの乖離を埋めて橋渡しの解釈を与える文献（例えば説法上の工夫）が存在しないかを探し求めてきた。

ここに問題が生じる原因の一つは、仏教学者が積徳行の意義とその実践に対して、根拠をパーリ正典にのみ求め、それ以外に存在する蔵外仏典（東南アジア独自撰述仏典）を研究していないことにあった。

本研究では、16～19 世紀の東南アジア大陸部：特にタイで編纂された積徳行を勧奨する蔵外文献：アーニサンサを考察する。貝葉写本として数多存在するアーニサンサ文献の中で、今まで完本の現存例がないとされてきた二大集成の一つであり、タイに特徴的な積徳項目が網羅されている『スッタジャータカニダーナ・アーニサンサ』（全 30 束：1 束は約 24 葉）について、従前の科研プロジェクトでは全束の写本をデジタル画像として揃えることに成功していた。本研究では、同集成文献を学問的に初めてローマナイズ／校訂／翻訳（和訳）しパーリ正典との対比・校合を行い、パーリ仏典発展史上におけるアーニサンサ文献編纂の目的とその変遷の解明を目指している。同時に、タイに根付いた在家者の積徳行実践の現実相とその意義・解釈について、当該アーニサンサが果たしてきた役割、特に出家者側のパーリ正典に教義的な根拠を求めつつもアーニサンサにおいて教理変容を認容した日常説法上の巧みな対応を文献学的に論証することを目的とする。

東南アジア仏教で強調される「積徳行」に対して、在家者の行為の支柱となったアーニサンサ文献の撰述意図を読み解き、教義理念と現実社会への出家者側の柔軟な対応の姿に迫り、将来にわたる南伝仏教文化圏における「積徳行」研究に有義な視座を樹立する。

個人研究

個人化社会の葬儀における僧侶介在に関する宗教社会学的研究ー法話に着目してー

研究代表者･東京分室 PD 研究員　磯部 美紀
（社会学）

日本においては、イエや地域共同体が解体されつつあり個人化が進む中で、1990 年代以降、従来の葬儀のあり方が批判的に検討され、「新たな葬儀」形態が展開している。その中で僧侶の介在しない葬儀も増加しており、葬儀における僧侶の位置づけも刻々と変化している。しかし従来の葬儀研究では、僧侶は伝統的な儀礼において固定的な役割を担う一構成員として扱われ、時代状況に応じて自らのあり方を模索する僧侶の姿を捉え切れていない。

本研究では、葬儀において能動的に変化し続けるアクターとして僧侶に注目する。特に、僧侶の語りである「法話」に着目し、死者と遺族（生者）の媒介者となる僧侶を記述することにより、個人化の進行が著しい都市部において葬儀に僧侶が介在する意味を宗教社会学的な観点から明らかにする。

本研究では次の 2 つの課題を設定する。課題 1 は、葬儀における法話の宗派性を明らかにすることである。まずは、一般読者向けに記された仏教各宗派の入門書を比較することで、葬儀の意味や僧侶の役割、死者のゆくえなどの示され方に関して、宗派ごとの共通点や相違点を示す。次に、仏教各宗派の法話マニュアル本の内容を分析することにより、葬儀の法話において重視される内容は、宗派ごとにどのような特徴がみられるのかを抽出する。そして、そこで導きだされた仮説の妥当性を検証する補完的な作業として、仏教各宗派の現役僧侶を対象に聞き取り調査を行う。

課題 2 は、首都圏の葬儀において僧侶と葬祭業者はそれぞれ葬儀における僧侶介在の意味をどのように見出しているのかを明らかにすることである。まずは、首都圏の開教寺院と伝統仏教教団の別院を対象に聞き取り調査を行なうことで、菩提寺を持たない、あるいは遠方に位置する人々の葬儀実態を明らかにする。続いて、首都圏の複数の寺院、葬祭業者を対象に聞き取り調査を実施することにより、葬儀をめぐる現状認識や法話実践の具体的な様相を明らかにする。

以上のことから、本研究では、万人に訪れうる大切な人との死別の苦悩において、宗教的アクターが一種のセーフティーネットとして機能する可能性を示す。

個人研究

現代における在日コリアンのキリスト教信仰に関する研究

研究代表者･東京分室 PD 研究員　荻 翔一
（宗教社会学）

国境を越えた人の移動が一般的にみられる現在、移民と宗教の関係を扱った研究は、社会学や文化人類学の分野で蓄積されている。先行研究の多くは、異郷の地で生活する移民にとって、宗教がしばしばそのエスニシティを維持・継承するうえで重要な役割を果たす存在となってきたことを明らかにしている。

こうした知見は、移民が宗教を持ち込んだ初期の状況を説明するのに適合的であるが、長期的なタイムスパンで移民と宗教の関係を捉えた場合、移民集団の変化とそれによって生じる問題は説明できない。すなわち、世代交代や本国からの新移民の到来によって生じる信者の文化的背景の多様化の中で、信仰やエスニシティがどのように維持・継承されるのか、あるいは変容していくのかという問題である。移民二世の信仰継承や親世代と異なる信仰・エスニシティをめぐる葛藤に注目した研究はあるものの、新移民の到来が旧移民の信仰やエスニシティに与える影響については、管見の限り、明らかにされていない。

それを踏まえて注目したいのが、在日コリアンのキリスト教信仰である。朝鮮半島から日本に渡ってきた人々とその子孫である在日コリアンの一部は、プロテスタント教会を設立し、その信仰を維持・継承してきた。現代の在日コリアンクリスチャンは、そのほとんどが日本で生まれ育った二世以降の世代であるが、彼ら／彼女らが集う教会にも、1960年代以降の韓国キリスト教の急成長などを背景に、ニューカマーの韓国人が参与するようになった。

その結果、韓国キリスト教の特徴である通声祈祷や新型賛美を積極的に礼拝に取り入れる教会もある。ニューカマーの到来による信者構成・教会プログラムの変容の中で、在日コリアンは信仰生活を送っており、その影響が顕著にみられる事例だと位置づけられる。

そこで本研究では、日本で生まれ育った在日コリアンクリスチャンが、教会内の韓国人牧師・信者や彼ら／彼女らの持ち込んだ宗教様式との接触によって、どのようにその信仰を形成・深化させているのか、さらにその過程でエスニック・アイデンティティがいかに結合・分離しているのかを明らかにすることを目的とした。

個人研究

乳児の物の受け取り動作の成立過程を共同注意の枠組みから解明する関係論的発達研究

研究代表者・教授　脇中 洋
（発達心理学／法心理学）

共同注意（joint attention）の発達研究は、生後1年間の乳児の社会的認知発達を示すものとして、社会的参照行為（social referencing）とともに過去40年にわたって探求が進められてきた。大藪（2020）によれば、対象の共有は「意図的共同注意」の段階に相当する。また野村・岡本（1979）によると、対象の共有は三項関係と述べられ、対物活動と対人関係が統合される契機であるとされている。しかし、なぜ生後9か月前後のこの時期に統合され始めるのか。「9か月の奇跡」（Tomasello 1995）と称されるこの発達機序の解明が、本研究課題の目的である。

共同注意に関する先行研究では、対象物を前にした視線の追従や交互注視、指差しがある（山本 1987, 児山ほか 2015 など）。だが物の受け渡しは対人交渉や社会性の発達の一端として扱われ、共同注意の成立や意図性の発露として扱った研究は見られない。対象を共有することで成立する物の受け渡し行為は、共同注意の発達研究の一画を占めてしかるべきであろう。

物の受け渡しの成立過程において、乳児は対象物に手を伸ばしてつかみ取るリーチング行為の成立（6, 7か月頃）を前提として、やがて他者から差し出された物を受け取るようになるが、この段階で乳児は他者に対して物を受け渡すことはない。乳児から他者に物を受け渡すのは早くても生後10か月頃であることは経験的にも知られている一方で、乳児の物の受け取りの成立過程を詳細に追った研究は見られないのである。

本研究では、（満期産健常児の）生後9か月前後の物の受け取り成立過程に焦点を当て、この過程で大人や乳児は何を読み取り、どのように手の動きを調整しているのか、所要時間はいかなる変化を見せるのかの詳細な分析を通じて、その発達的変化が「意図的共同注意」の発達過程とどう連動しているのか、その機能的連関性を明らかにしたい。つまり物の受け取りがどのように成立するのかの分析を通じて、対象の共有が成立する発達機序を明らかにし、その結果として共同注意の成立過程を説明しようと試みるものである。

大人から乳児への物の受け渡し時の双方の手のひらの向きと名称

	手のひらの向き	名称	手のひらの向き	名称
大人	上向き↑	a. 差し出し	下向き↓	b. 掴み与え
乳児	下向き↓	c. 掴み取り	上向き↑	d. 受け取り

乳児から大人へと物が受け渡される場面の発達的変化を双方の手のひらの向きで示すと、当初大人の「a. 差し出し」と乳児の「c. 掴み取り」によって成立していた段階から、やがて大人の「b. 掴み与え」と乳児の「d. 受け取り」によって成立するようになる。

ここで乳児が大人の持つ対象物に手を伸ばし始めたのを大人が察知して受け渡す場合は、乳児が意図を表出する主体となるのに対して、大人が乳児に対象物を差し向け乳児がそれに気づいて受け渡しが成立する場合は、乳児が大人の意図を理解する側となる。

最初期に成立する受け渡しは、大人の「a. 差し出し」に乳児が手を伸ばして「c. 掴み取り」によって成立する受け渡しである。大人の中には当初「b. 掴み与え」の動作をしていたのが、乳児の様子を見て「a. 差し出し」の動作へと修正する動きも見られる。やがて乳児の「c. 掴み取り」の動作に対して、大人は「d. 受け取り」の動作を求めたり、乳児の方から大人の「b. 掴み与え」動作に呼応して「d. 受け取り」の動作へと修正したりする。

こうした修正動作が生起する移行期に、大人や乳児は何を読み取りどのように個々の動作を修正しているのか。また移行段階で受け渡しにかかる所要時間はいかなる変化を見せるのか。これらの発達的変化が乳児の共同注意の発達過程のどの段階と連動しているのか、その機能的連関性を明らかにする。

物の受け渡し場面で乳児の意図表出を促し明確化していく様相を通じて、いわゆる自発性というものが（周囲の大人からの調整に巻き込まれるようにして）実は作られていることが明らかになるかもしれないと考えており、この自発性が作られるプロセスを国際比較による比較文化的研究あるいは霊長類研究等の比較行動学的研究へと発展させる余地もあるだろう。

❖児山隆史ほか（2015）「乳児の共同注意関連行動の発達」教育臨床総合研究 14. 99-109.
❖野村圧吾・岡本夏木（1979）「ゼロ・一歳児の発達の特徴と保育」（園原監修　子どもの発達と教育）
❖大藪泰（2020）『共同注意の発達』
❖山本政人（1987）「物の受け渡し課題で見る乳児の対人的理解の発達」教育心理学研究 35(1), 74-78.
❖Tomasello, M.（1995）Joint attention as social cognition. In C. Moore et. al.（Eds.）. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp.103-130.

2022(令和4)年度東京分室PD研究員個人研究　研究目的紹介

個人研究

現代日本における葬送儀礼と僧侶に関する研究－首都圏の事例を中心に－

研究代表者･東京分室PD研究員　磯部 美紀
（社会学）

「葬式仏教」の語が示すように、日本において葬儀に僧侶が介在することは「自明」とも言えることであった。しかし個人化の進展とともに、多様な葬儀形態が受容されつつあり、人々は慣習に縛られることなく、故人や遺族の意向を考慮しながら葬儀形態を選択できるようになった。一方、これまで個人を包摂してきたイエや地域共同体といった中間集団が解体されつつあるなかで、葬儀という営みは遺族や死にゆく人自身が個別に対処すべき課題になりつつある。1990年代以降、家族構造の変化等を背景として「新たな」葬儀が展開する中で、僧侶の介在しない葬儀も増加しており、葬儀における僧侶の位置づけも変化している。その状況下では、葬儀に僧侶が関与する意味のほか、葬儀そのものの意味が問い直されている。

そこで本研究は、首都圏における葬儀の事例を中心にして、現代日本の葬儀における僧侶介在の意味を宗教社会学的な観点から明らかにすることを目的とする。この目的を果たすために、理論社会学と経験社会学の両方を用いる。

理論社会学的にはまず、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロのパースペクティヴ論やアフェクト論を参照することで、弔いにおける死者と生者の関係を捉え直す。また、ヴィクター・ターナーのコミュニタス論やジグムント・バウマンの共同体論、ナンシー・フレイザーの公共性論などを援用することにより、現代日本の葬儀（なかでも僧侶の介在する葬儀）に顕在化する共同性を分析する。

また経験社会学的な視点として、参与観察や聞き取り調査の手法を用いて、現実の葬儀に関与する諸アクター（僧侶、葬祭業者、遺族など）の考えを直接聞き取り、記述する方法を採用する。具体的には、菩提寺以外の僧侶（派遣僧侶、葬儀社と提携する僧侶）や葬儀仲介業者（「小さなお葬式」、「イオンのお葬式」など）、それらを利用した遺族を対象に質的調査を実施するほか、故郷を離れた人々（離郷檀信徒）に対する伝統仏教教団の取り組み（「首都圏仏事代行制度」など）にも注目する。

個人研究

中国仏教における不退転の概念内容の解明

研究代表者･東京分室PD研究員　澤﨑 瑞央
（仏教学）

どのように生きそして死ぬかという根本的な問題に対して、仏教思想では、どのような理想的人間像を構築してきただろうか。経典や物語、譬喩を通して様々な人間像が示されるなか、基本となるのは煩悩を断じる智慧を得たことから「聖者」とされる人間像だろう。その点を踏まえた上で、大乗経典では、行者の目指すべき段階として「不退転」を掲げる。不退転に関しては特に「般若経典」に詳しく示されており、中国ではその注釈書とされる『大智度論』の訳出が大きな影響力をもった。そこで、本研究では『大智度論』に示される不退転の概念内容を解明することで、中国をはじめとする東アジア仏教に伝えられた理想的人間像の一端を明らかにすることを試みる。

これまで不退転に関する研究は、主に4つの要因からあまり進められてこなかった。まず①総じて十分な説明が無いまま使用されること、②煩悩を断つことを根拠とする不退の思想から展開して大乗仏教に特有の語と関連して創出されていること、③現実には到達不可能と思われること、④主に国外の研究状況として、宗教的かつ実践的な側面よりも哲学的側面に焦点が当てられていたことである。このような術語の意味内容を解明するには、仏教教義を解釈する論書の見解は重要となる。なかでも『大智度論』は、①不退転を詳述した「般若経典」の現存する最古の注釈書である点、②同一文献内において不退転を含めた関連語句にアビダルマの方法論を踏まえて逐語的解釈が施されている点、③東アジア仏教に多大な影響力をもったという三点で極めて重要な文献といえる。しかし、文献の著者が確定しないために、思想研究は進展していなかった。

本研究では『大智度論』を文献の著者性を捨象する方法論を用いることで上記の課題を克服する。さらに、『大智度論』が修行の指南書として用いられていた点を踏まえ、実践的な視点をもつ。このような方法論を用いることで、単なる術語概念の検討に留まらず、大乗仏教という思想的営みを考察することにつなげる。

公開講演会・研究会開催報告（2022. 4. 1～2022. 9. 30）

東方仏教徒協会　公開講演会　開催報告

（講師：ヨン・ボルプ先生）
国際仏教研究（英米班）研究員　Michael J. Conway

2022年5月31日（火）の18時より、東方仏教徒協会の初回の公開講演会が開催された。パンデミック以前から、国際仏教研究班は、年に三回程度、海外で活躍している研究者を招聘し、公開講演会を開催してきたが、新型コロナウィルス感染症の流行に伴い、2020年度と2021年度には開催することができなかった。しかし、パンデミックの影響により、Zoom配信による講演会の開催が一般化し、以前より広い層の研究者の参加が可能となったことを受けて、東方仏教徒協会の事業と位置付け直して、2022年度に再開することにした。

東方仏教徒協会では、学術誌を年に二回、発行しているが、そのために広い範囲から良質な原稿を獲得する必要がある。そこで、著名な研究者を招聘し、その研究の一部を発表していただくことによって、発表者の原稿の投稿が期待できるのみならず、Zoom上で視聴する研究者も、『*The Eastern Buddhist*』誌への投稿を考えるようになると考えられる。

この新しい取り組みの初回の発表者として、ヨーロッパの宗教学会で日本の宗教研究で重要な業績を収めているヨルン・ボルプ（デンマーク・アーハウス大学准教授）氏をお招きし、「Who Owns Buddhism? Postcolonialism, Decolonization and the Study of Religion」（仏教は誰の所有物か？－ポスト植民地主義、非植民地化と宗教研究）という題で発表していただいた。

ボルプ氏は、日本の宗教に関して様々な研究を進めてきた。氏は、現代の妙心寺の活動について2002年に単著を出版してから、最新の宗教学の理論を応用しながら、日本の宗教、または海外における日本の宗教の伝播について様々な成果を発表している。

5月には、パンデミックによる入国規制はまだ敷かれていたが、ボルプ氏は、「仏教学の非植民地化」および「日本宗教と廃棄物」という二つのテーマについて研究を進めるために来日し、3月から6月まで本学では客員研究員となっていた。そこで、滞在中の成果を広く共有するために、上記の題目で発表した。

講演会の会場は、響流館3階のメディア演習室であったが、入校制限が設けられていたので、会場での参加者は、東方仏教徒協会および国際仏教研究の関係者に限り、公開はZoomによって行った。日本時間の夕方は、ヨーロッパでは午前中で、北米では夜中になるので、参加者は日本国内およびヨーロッパ在住のもののように見受けられたが、当日、参加できない人のために講演の部分を録画し、東方仏教徒協会のホームページで公開している。当日のZoom上の参加者は、40人を超えていたので、対面のみの開催より大勢の参加者を得たと思われる。

ボルプ氏の講演は、近年の西洋の学界で取り上げられているポスト植民地主義の理論を仏教研究に適応しようとする際に、どのような問題が浮上するのかということを主題としていた。西洋の学問界の差別的な体質について指摘がなされ始めてから、50年が経とうとしているが、近年では、学者の社会的役割として、制度的差別の是正が求められるようになり、人種によるアイデンティティが学問界の重要な論点となっている。

その風潮の中、仏教研究の基本的な手法が問い直されつつあり、文献学的方法論に潜む差別的視点が指摘され、その超克、つまり「仏教学の非植民地化」の必要性が、西洋の様々な研究者から提唱されている。

ボルプ氏は近年のこの傾向とその背景について細説した上で、それに対する疑問や危惧をも提示し、今後の仏教研究の方向性についていくつかの問題提起をした。文献学とオリエンタリズムの密接な関係について、サイド氏がその概念を規定した時には明確に論じられていた。ボルプ氏はその指摘の妥当性を認めつつ、近年、その理論に、人種の概念が更に加わり、新たな人種的本質主義が基調をなしているという点に関する危惧を述べた。

人文学の有用性について、多方面から問いが投げかけられている中で、宗教学者がその存在意義を差別の是正に置こうとしていることについても、ボルプ氏は疑問を呈した。

更には、日本の仏教学界において、非植民地化という言葉がほとんど取り上げられず、西洋における近年の議論に類似する言説の少なさに言及し、近年の非植民地化の議論の背景には、東洋の現実から遊離した西洋の価値体系の存在を指摘し、サイド氏が指摘するオリエンタリズムの変容形態として展開されている可能性をも示唆した。

大谷大学の会場内からの質問もあり、また、オンラインの参加者からも質問を受け付けることができ、講演の終了後に活発な質疑応答が行われた。

このように西洋の学問界で重要な問題として議論されている課題に関する研究を、東方仏教徒協会の初回の講演会にて発表することができたことは、協会の活動に関して広報活動ともなり、今後の『*The Eastern Buddhist*』誌の紙面作りに寄与することになると思われる。

2022年度の後期と春休みには、更に東方仏教徒協会主催のオンライン講演会を開催する予定である。

講師　ヨン・ボルプ先生

会場内の様子

歎異抄ワークショップ開催報告(2022. 4. 1～2022. 9. 30)

第８回　『歎異抄』翻訳研究ワークショップ開催報告

国際仏教研究（英米班）研究員　Michael J. Conway

2022年８月６日（土）から８日（月）までの３日間、本学の響流館３階の演習室およびメディアホールにて、『歎異抄』翻訳研究ワークショップを開催した。新型コロナウィルス感染症の流行がアメリカで始まった2020年３月にバークレー市で行われた第７回のワークショップから約２年半ぶりの開催となった。パンデミックによる様々な制約を受けながらも、世界各地から大勢で集まることができなくなっていた状況を打破して、プロジェクトを再開することができたのは、何よりも大切な成果であった。

本プロジェクトは2017年に、本学の真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校の東アジア研究所と龍谷大学の世界仏教文化研究センターの間で結ばれた学術交流協定による共同研究である。当初では、江戸期に作成された『歎異抄』の注釈書を翻訳するために、年に二回、ワークショップを開催し、その中で、翻訳作業を行うとともに、『歎異抄』の受容の過程に関する研究発表を行うことによって、二冊の研究所の発行に向けた準備をする予定であった。夏には、京都で開催し、春にはバークレーで開催することで2017年の３月から作業を進めてきた。初回のワークショップは2017年３月にバークレーで開催され、2017年８月と2019年６月に本学が会場となった。龍谷大学は2018年６月にワークショップを主催し、カリフォルニア大学バークレー校では、2018年と2019年の３月にも開催した。翻訳作業は当初の予定よりやや遅れていたが、プロジェクトは概ね順調に勧められていた。

しかし新型コロナウィルス感染症の流行により、2020年３月のワークショップをハイブリッド形式で開催するために日程を縮小する必要があり、そしてZoom上の翻訳作業はあまりスムーズに進めることができなかった。そこで、対面で開催できる状況が整うまでワークショップ開催を見送ることにしていた。

2022年３月に日本の政府が入国規制を大幅に緩和することを発表し、研究活動を目的とした短期滞在が約２年ぶりに認められるようになった。それを受けて、８月に本学で開催することにした。(2023年度には国際仏教研究班ではハンガーの協定校との共同研究プロジェクトにおいて国際シンポジウムを開催する予定であるから、本学の担当を前倒しにし、2023年度と2024年度に龍谷大学がワークショップを開催することにした。)

本プロジェクトの目的の一つは、次世代の研究者の育成にあるので、協定では、主催校が他の研究機関に所属する大学院生および若手研究者の旅費を補助することになっている。参加募集を発表した時に、補助について周知し、申請するように呼びかけた。しかし研究を目的とした短期滞在が認められるようになったものの、ビサの申請や許可に関して、不透明な点も多く残っていたので、若手研究者からの旅費補助申請はなかった。また、ワークショップのみに参加するために入国する参加者もなかった。そこで、全体の参加者数はパンデミック以前よりはやや少なかったが、日本に別の事由で滞在していた海外の研究者も一定数、参加し、そして大谷大学と龍谷大学の大学院生や若手研究者の参加もあったので、パンデミック以前に極めて近い形で開催することができた。

ワークショップは８月６日（土）の10時から、メディアホールでの全体会から始まった。始めて参加する人のために今までのプロジェクトの概要と成果について、コンウェイが説明し、感染症防止対策を含めた注意事項も伝達した。そこから三つの作業部会に分かれて、翻訳作業が行われた。

マーク・ブラム（カリフォルニア大学バークレー校教授）氏が中心となって、作業を進めている部会では、円智の『歎異抄私記』を翻訳している。その部会は、メディア演習室で開催された。３日間を通して、『歎異抄』の第11条に対する円智の注釈を翻訳し、その内容について議論を進めた。

嵩満也（龍谷大学教授）氏が担当している寿国の『歎異抄可笑記』の翻訳作業部会は、演習室２で開催された。嵩氏のグループでは『歎異抄』の第10条と第11条に対する注釈の翻訳作業を進めたが、第11条の後半部分について完成することができなかった。

コンウェイが担当している部会では、深励の『歎

異抄講林記』を翻訳しており、今回のワークショップでは、『歎異抄』の第 10 条と第 11 条に関する深励の解釈の確認を行った。ワークショップ中には、参加者と、全ての内容を確かめることができなかったが、第 11 条の終わりまでの翻訳はほぼ完成している。

ワークショップの基本的な日程として、午前中の作業部会終了後に昼過ぎから 1 時間ほどの昼食休憩を取り、そして 13 時から 17 時まで、コーヒー休憩を挟んで作業を続けることにした。しかし、7 日（日）の 13 時から、そして 8 日（月）の 16 時から、全体で集まり、作業内容を確認し、各部会で話題となっていた問題について担当者が発表し、全体で共有し、議論をする機会を設けた。

各作業部会には、英語を母国語とする者と日本語を母国語とする者がそれぞれの強みを生かしながら、完成度の高い翻訳の作成に取り組んでいった。参加者は、全日程を通して、同じ部会に参加したのではなく、部会を変更して、それぞれの著者の独自性について理解を深め、またそれぞれの翻訳に貢献していった。

入国の制限があったため、英語を母国語とする参加者が以前のワークショップよりやや少なかったので、それぞれの注釈書の翻訳を表現豊かに英語にすることが、以前と比べて、充実した形でできなかったが、それぞれの部会で、教学的背景を十分に吟味した、極めて正確な翻訳が出来上がったと思われる。

また、今回のワークショップでは、研究発表を行うことができなかった。新しい参加者が多く加わらなかったということもあり、また以前に発表の意欲を示した参加者は、パンデミックの影響によって、今回の参加を断念したので、『歎異抄』の受容過程について新しい成果を発表することができなかった。

2022 年 9 月には、日本への入国制限が一段と緩められたから、来年の 6 月に予定されている龍谷大学主催のワークショップでは、海外からより多くの参加者が望まれる。その際に、パンデミック以前と同様の開催形態にすることができると期待している。

『歎異抄私記』部会

『歎異抄講林記』部会

『歎異抄可笑記』部会

第９回　『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究（英米班）研究員　Michael J. Conway
博士後期課程真宗学専攻第三学年　鶴留　正智
修士課程真宗学専攻第二学年　本多　勇哲

2022年９月２日（金）から４日（日）にかけて、カリフォルニア大学バークレー校の東アジア研究所にて、第９回の『歎異抄』翻訳研究ワークショップが開催された。パンデミックの影響により、２年半、開催できなかったが、その遅れを少しでも取り戻すために、８月に本学で開催された第８回のワークショップに引き続き、バークレー市で開催することにした。

本プロジェクトの詳細については、本号に掲載されている第８回の報告を参照されたい。

第９回のワークショップでは、新型コロナウィルス感染症の流行の影響を受けつつ、江戸期に著された『歎異抄』の注釈書を英訳する作業を進めることができた。

本プロジェクトの目的の一つは、次世代の研究者の育成にあるので、本学に在籍する大学院生に対して旅費補助を行っている。第９回のワークショップには、鶴留正智（本学大学院博士後期課程第３学年）氏と本多勇哲（本学大学院博士前期課程第２学年）に旅費の補助を行ったので、以下に二人の報告書を紹介する。

鶴留氏の報告は以下の通りである。

去る2022年９月、カリフォルニア大学バークレー校にて、「歎異抄ワークショップ」が開かれた。このワークショップは、2017年３月から継続して開かれている。カリフォルニア大学バークレー校、龍谷大学、そして本学の三大学が共同し、開催場所も持ち回りである。前回は、この一月前、2022年８月に大谷大学で開かれた。

『歎異抄』は、親鸞没後、鎌倉時代頃に成立し、最古の写本は室町時代であるが、このワークショップで翻訳の主たる対象とするのは、それより時代が下って、江戸時代の講義録である。江戸期は、学寮が整備されるなど、浄土真宗にとって学問的に進歩した時代だった。『歎異抄』の講義録もさまざま残されているが、本ワークショップが特に注目するのは、円智、寿国、深励の三氏が残した講義録である。

私が特に参加したのは、円智の部会であった。さまざまなことが議論されたが、特に印象に残っているのは、同じことばであっても、その登場箇所によって、翻訳で当てることばが相違することである。

たとえば、「学解」という熟語がある。このことばは、一般には、「学び解すること」のように解釈できるのだが、円智の講義録には、「解を学ぶこと」という意味の文が出てくる。円智が「学解」に対して特別な解釈を施していると言える。しかし、最初から「学解」を「解を学ぶこと」の意味で翻訳してしまうと、その特別さが失われる。そのため、部会では、まず「学解」を「学び解すること」の意味で翻訳し、後の箇所では「解を学ぶこと」で翻訳した。

このような作業は、まず一人が下訳を作り、参加者が原文と照らし合わせて訳文に対する違和感、代替案を提示する。さらに、その代替案に対して、また別の参加者が、代替案では原文の流れに沿った印象を受けとることができないことを指摘する。このような共同作業によって、講義録の翻訳が作成されていく。

また、講義録は、『歎異抄』の原文の細かいところにまで註釈を施しているから、講義録の英訳を通して、『歎異抄』の英訳が取りこぼしている箇所を指摘することができる。既存の英訳は意訳の側面が強いから、江戸期の講義録の英訳を通して、また新たな『歎異抄』の英訳の選択肢を提供できることになるだろう。『聖書』にもさまざまな翻訳があるが、どの翻訳が逐語的に正確かというより、どの翻訳がどのシーンに適しているかなどを勘案して選ばれるようである。このプロジェクトを通じて、これからの『歎異抄』の英訳に、一つの逐語的で、学問的な翻訳が加わることになるだろう。

最後に、このワークショップの行われた環境について書いておきたい。冒頭に書いたように、今回のワークショップはアメリカで行われた。このワークショップは2020年にもアメリカで開催されたのだが、2020年はコロナ禍の始まりの年だった。私は、残念ながら、そのワークショップには対面で参加することがかなわなかった。今回のワークショップは、このコロナ禍がようやく明けつつある中での開催となった。

やはり、対面で行われる議論は、微妙な体温まで伝わってくるようで、美しい強弱がある。うまく表現することはできないが、今回のワークショップもまた、対面でしか得られないものを得られたと思う。感染対

策に気を配らなくてはならないのは当然だが、このままコロナ禍が落ち着き、このワークショップでも継続的に成果が出せることを願っている。

本多氏の報告は以下の通りである。

この度、9月の2日から4日にかけて、『歎異抄』翻訳研究ワークショップがアメリカ、バークレーにて開催された。なお、私の本ワークショップへの参加は今回が初である。

今回のワークショップでは様々な気づきがあった一方で、課題となるべき点も初参加ながらしばしば見受けられた。

まず、私の気づきに関しては、法然が残した言葉とされるものの中に現在は伝わっていないであろうものが含まれていた点について触れたい。私が寿国班に参加した際、法然の言葉として彼が当たり前のように引用しているたとえ話が出てきたのだが、それは『浄土宗全書』などには記載されていない、つまり現在では法然の言葉としては伝わっていないものであった。これを単なる時代の違いとして片づけてしまえば話は早いだろう。しかし、この点について議論する中で、「このようなことを追求していけば、時代ごとでどのような言葉が法然のものとして伝えられていたのかなどが明らかになるのではないだろうか。そして、ひいてはそれらをもとに、伝聞情報の相違に基づく時代ごとの法然観の相違なども明らかになるのではないだろうか。」という考えが生まれたのである。また、ここでは本ワークショップで触れた文献のごく一部分にのみ注目したが、そもそも本ワークショップで扱う文献の全体が様々な研究の一助となるような大切な資料であった。そのこともこのワークショップに実際に参加することを通じて理解できたのである。

一方で、議論の場において研究分野の偏りが生じることがあるという点が課題であったとも感じた。そもそも、今回は龍谷大学からの学生の参加が無く、大谷大学と現地からの参加者が大半を占めていたということもあり、余計に参加者の研究分野の偏りが生じてしまったようにも思われた。また、各班に分かれる際に同じような研究分野の者どうしでかたまってしまったことも原因の一つであると思う。このような偏りが生じてしまうと、議論の際に同じような視点を持った者どうしの議論になってしまいがちなため、班ごとで議論の幅に差が生じてしまっているように感じた。班ごとで研究分野に偏りが生じないようにバランス良く参加者が分かれるべきであろう。

今回のワークショップの参加は私にとってとても有意義なものであったし、また本プロジェクトでの研究は今後の教学研究などに大いに貢献するであろうことも実感できた。本プロジェクトが無事に完了することを心から願っている。

『歎異抄講林記』部会の様子

上記の二人の報告から、本プロジェクトが様々な形で若い研究者に刺激を与え、研究に対する新たな視座を開いていることが見て取れる。

海外研究調査報告（2022. 4. 1～2022. 9. 30）

大谷大学所蔵仏教写本研究　海外調査出張報告（タイ）

大谷大学所蔵仏教写本研究　研究代表者　DASH Shobha Rani

大谷大学所蔵仏教写本研究班は現在「パーリ語貝葉写本の研究－保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心に－」というテーマで研究活動を行っている。大谷大学には、様々な言語と文字で書かれた仏教に関する写本が所蔵されている。その中で、タイ王室から贈られたと思われるパーリ語で書かれた貝葉写本を含む多くの写本が存在する。本研究班は仏教に関する「総合的な写本研究」を目指すため、その学際的・国際的研究が必要とされる。上記の貝葉写本はタイからのものであるため、まずはタイにおいてその分野での研究を行っている研究者、組織などの情報を収集し、ネットワークを構築することが必要である。その目的を達成するために、2022 年 9 月 9 日～2022 年 9 月 15 日までタイへ向かい、本班の嘱託研究員の Suchada Srisetthaworakul 博士の協力のもと、現地の研究者との共同研究や本研究班の研究の協力について話し合った。

パーリ語、写本研究および東南アジアとりわけタイの宗教文化を長年研究されている国際的に著名な Peter Skilling 博士と会い、本研究の趣旨を説明し、今後の指導をお願いした。博士に写本校訂について貴重なアドバイスをいただいた。

図 1：Peter Skilling 博士との懇談

マヒドン大学の宗教学部の学部長の Phibul Choompolpaisal 博士は大谷大学と学術協定を結び、協定の一環として本格的にタイの貝葉写本研究へ参加する意欲を示した。この際に、宗教学部の学生たちの要望により大谷大学の紹介および「Religion and Caste System in India」というテーマでインドの宗教と文化に関する講演も行った。

図 2：マヒドン大学宗教学部学部長との懇談

図 3：マヒドン大学での講演会の様子

マハームクト仏教大学はタイ王族と関係する大学である。当大学大学院仏教学科の学部長の Phrasrivinayaphon 博士とその他の複数の教員と懇談を行った。本班の研究の趣旨を説明したところ、日本の大学との交流を求め、大谷大学への訪問の意思も示された。その積極的な様子から今後の研究への協力が期待される。

図4：マハームクト仏教大学での懇談会

図5：マハームクト仏教大学での懇談会にて筆者による大谷大学および本研究班の紹介

シルパコロン大学の U-tain Wongsathit 博士を中心にその他の研究者を交えて懇談をした。今後定期的にオンライン研究会を通して共同研究を行うことについて話し合った。Wongsathit 博士は、インドでサンスクリット語の学習を習得しており、国際的な観念を持っている研究者である。以前ドイツとの共同研究プロジェクトである「Manuscriptology and Digital Humanities」（https://www.sai.uni-heidelberg.de/krs/forschung/manuscriptology-and-digital-humanities.html 参照）のオンライン講演会にも参加された方であり、その際、本研究に関する貴重なコメントも提供していただいている。オンライン講演会でのこの出会いを今回対面の懇談会につなげるきっかけとなった。

図6：シルパコロン大学大学での懇談

大谷大学所蔵のタイからの貝葉写本の研究を現地の研究者およびその他の研究者たちの協力を得ながら行いたく、今後も研究者同士のネットワークの構築を続けていく予定である。

真宗総合研究所彙報　2022. 4. 1 ～ 2022. 9. 30

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2022 年 7 月 12 日㈫16 : 30～17 : 50
（博綜館 5 階第 5 会議室）

1．『真宗総合研究所研究紀要』投稿ガイドラインについて
2．その他

◇2022 年 7 月 13 日㈬～7 月 18 日㈪
（サイボウズによる書面会議）

1．『真宗総合研究所研究紀要』投稿ガイドラインについて

◇2022 年 9 月 8 日㈭10 : 30～12 : 10
（博綜館 5 階第 5 会議室）

1．特別研究員の委嘱について
2．2022 年度研究組織について
3．東京分室 PD 研究員の公募について
4．一般研究（予備研究）の募集について
5．特定研究・指定研究・資料室　研究計画作成及び研究費の管理について
6．『真宗総合研究所研究紀要』査読・校閲について

■E ラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開

【研究会】

日　時：2022 年 8 月 5 日㈮16 : 00～17 : 30
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出席者：箕浦暁雄　戸次顕彰　本明義樹　松下俊英
内　容：「仏教入門」の公開配信に向けた課題の検討

【撮影】

日　時：2022 年 6 月 9 日㈭13 : 00～14 : 30
場　所：響流館 4 階プレゼンテーションルーム
出席者：一楽真　箕浦暁雄　戸次顕彰　本明義樹　難波教行　松下俊英　本明由美子
内　容：「仏教入門」の撮影（講義担当：箕浦暁雄）

日　時：2022 年 6 月 23 日㈭13 : 00～14 : 30
場　所：響流館 4 階プレゼンテーションルーム
出席者：一楽真　箕浦暁雄　戸次顕彰　本明義樹　難波教行　松下俊英　本明由美子
内　容：「仏教入門」の撮影（講義担当：松下俊英）

日　時：2022 年 7 月 14 日㈭13 : 00～14 : 30
場　所：響流館 4 階プレゼンテーションルーム
出席者：戸次顕彰　本明義樹　本明由美子
内　容：「仏教入門」の撮影（講義担当：戸次顕彰）

国際仏教研究

【会議】

◇第 1 回　国際仏教研究班　全体ミーティング
日　時：2022 年 6 月 2 日㈭14 : 40～16 : 10
場　所：真宗総合研究所内ミーティングルーム
参加者：井上尚実、Michael J. Conway、Dash Shobha Rani、松浦典弘、箕浦暁雄、アマミチヒロ、千葉一生、Woo Jongin

〈欧米班〉

◇第 1 回　歎異抄ワークショップ会議
日　時：2022 年 6 月 16 日㈭14 : 40～16 : 10
場　所：真宗総合研究所内ミーティングルーム
参加者：井上尚実、Michael J. Conway、アマミチヒロ、千葉一生、Woo Jongin

◇第 2 回　歎異抄ワークショップ会議
日　時：2022 年 7 月 14 日㈭14 : 40～16 : 10
場　所：真宗総合研究所内ミーティングルーム
参加者：井上尚実、Michael J. Conway、アマミチヒロ、千葉一生、Woo Jongin

◇第 3 回　歎異抄ワークショップ会議
日　時：2022 年 8 月 5 日㈮15 : 00～16 : 10
場　所：真宗総合研究所内ミーティングルーム
参加者：井上尚実、Michael J. Conway、アマミチヒロ、千葉一生、Woo Jongin

◇第 1 回　国際シンポジウム会議
日　時：2022 年 9 月 22 日㈭14 : 40～16 : 10
場　所：真宗総合研究所内ミーティングルーム
参加者：井上尚実、Michael J. Conway、アマミチヒロ、千葉一生、Woo Jongin

■西蔵文献研究

【研究成果の刊行】

◇Bu ston's Introduction to Buddhism: A Critical Edition of First Chapter of the *Bu ston chos 'byung*. 2022 年 6 月 30 日刊行

『プトン仏教史』第1章仏教概説の校訂テキスト。引用文献の典拠を注記。

■清沢満之研究

【ミーティング】

◇第1回
日　時：2022年4月28日㈭16：20～17：50
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：今年度の活動方針の確認
文献リスト作成作業報告と検討

◇第2回
日　時：2022年5月12日㈭16：20～17：50
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：活動報告及び各作業報告と検討

◇第3回
日　時：2022年5月26日㈭16：20～17：50
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：活動報告及び各作業報告と検討

◇第4回
日　時：2022年6月16日㈭16：20～17：50
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：活動報告及び各作業報告と検討

◇第5回
日　時：2022年6月30日㈭16：20～17：50
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：活動報告及び各作業報告と検討

◇第6回
日　時：2022年7月14日㈭16：20～17：50
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：活動報告及び各作業報告と検討

◇第7回
日　時：2022年7月28日㈭16：20～17：50
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：活動報告及び各作業報告と検討

◇第8回
日　時：2022年9月15日㈭13：00～14：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
会　場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目　的：活動報告及び各作業報告と検討

【全体会議】

◇第1回
日　時：2022年6月21日㈫18：00～19：30
出席者：西本祐攝、西尾浩二、名畑直日児、
福島栄寿、山雄優生、藤井了興
会　場：ミーティングルーム
目　的：今年度の研究計画についての共有
清沢班作業全体の進捗状況報告及び作成リストの内容検討

■大谷大学所蔵仏教写本研究

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究
プロジェクト公開研究発表会】

◇第8回
日　時：2022年6月10日㈮
会　場：オンライン（Zoom）
発表者：Dr. Borayin Larios
（University of Vienna）
発表題名：Presentation of the Muktabodha Indological Research Institute

◇第9回
日　時：2022年6月24日㈮
会　場：オンライン（Zoom）
発表者：Prof. Dr. Dominik Wujastyk
（University of Alberta）
発表題名：Jam Today: Managing Large Manuscript Traditions with Digital Humanities Tools

◇第10回
日　時：2022年7月15日㈮
会　場：オンライン（Zoom）
発表者：Dr. Suchada Srisetthaworakul
（Mahidol University）
発表題名：Palm-leaf Manuscripts in Southeast Asia: Demonstration of Creating a Database of Pāli Tipiṭaka
（Survey, Digitization and Transcription）

◇第11回
日　時：2022年7月29日㈮

会　場：オンライン（Zoom）
発表者：Florinda de Simini
（Università di Napoli L'Orientale）
Dominic Goodall
（EFEO, Pondicherry）
Csaba Kiss
（Università di Napoli L'Orientale）
Kengo Harimoto
（Università di Napoli L'Orientale）
発表題名：Editing the Śivadharma Corpus

【ミーティング・情報交換】
◇第1回
日　時：2022年4月20日㈬20：00～21：30
場　所：オンライン（Zoom）
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ（大谷大学）
Prof. Ute Hüsken・Dr. Anand Mishra
（ハイデルベルク大学）
内　容：2022年度の共同プロジェクトの計画について

◇第2回
日　時：2022年5月3日㈫21：45～23：00
場　所：オンライン（Line）
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ（大谷大学）
Dr. Suchada Srisetthaworakul
（Mahidol University，本班嘱託研究員）
内　容：2022年7月15日の研究発表の打ち合わせ、情報交換

◇第3回
日　時：2022年9月2日㈮10：45～11：45
場　所：オンライン（Line）
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ（大谷大学）
Dr. Suchada Srisetthaworakul
（Mahidol University，本班嘱託研究員）
内　容：2022年9月のタイ現地調査に関する打ち合わせ、情報交換

【海外出張】
◇2022年9月9日㈮～9月15日㈭
出張先：バンコク（タイ）
要　務：現地資料調査、情報収集及び現地研究者とのネットワーク構築、協定締結に向けた現地視察及び打ち合わせ
出張者：ダシュ・ショバ・ラニ（大谷大学）
Dr. Suchada Srisetthaworakul
（Mahidol University，本班嘱託研究員）

■東京分室指定研究
【ミーティング】
◇第1回
日　時：2022年4月4日㈪10：00～12：00
場　所：真宗総合研究所事務室・東京分室
（オンライン）
出席者：荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央、
（事務室オンライン参加：福島栄寿、
筑田一毅、岩﨑千裕）
内　容：今年度の分室の体制等の打ち合わせ

◇第2回
日　時：2022年4月25日㈪13：00～17：00
場　所：真宗総合研究所東京分室
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央
内　容：今年度の指定研究等の打ち合わせ

◇第3回
日　時：2022年5月23日㈪13：00～17：00
場　所：真宗総合研究所東京分室
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央
内　容：今年度の指定研究等の打ち合わせと分室長と各PD研究員との面談

◇第4回
日　時：2022年6月13日㈪13：00～17：00
場　所：真宗総合研究所東京分室
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央
内　容：今年度の指定研究の打ち合わせとPD研究員2名による研究報告

◇第5回
日　時：2022年6月27日㈪13：00～17：00
場　所：真宗総合研究所東京分室
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央
目　的：今年度、秋以降のシンポジウムの打ち合わせとPD研究員2名による研究報告

◇第6回
日　時：2022年7月25日㈪13：00～17：00
場　所：真宗総合研究所事務室・東京分室

（オンライン）
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央（事務室オンライン参加：筑田一毅、岩﨑千裕）
目　的：今年度の指定研究（沖縄調査）の現地調査等の打ち合わせ、分室長と各PD研究員との面談、及び事務局からPD研究員へ事務連絡

◇第7回
日　時：2022年8月23日㈫13：30～17：00
場　所：真宗総合研究所事務室ミーティングルーム
出席者：藤元雅文（主事）、福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央
目　的：藤元主事とPD研究員との懇談後、分室長とPD研究員による指定研究の現地調査等の打ち合わせ

◇第8回
日　時：2022年9月12日㈪13：00～17：00
場　所：真宗総合研究所東京分室
出席者：藤元雅文（主事）、筑田一毅、福島栄寿、荻翔一、磯部美紀、澤﨑瑞央
目　的：藤元主事の東京分室視察及び、PD研究員との懇談後、分室長とPD研究員による秋開催のシンポジウム及び、指定研究の現地調査等の打ち合わせ

◇第9回
日　時：2022年9月26日㈪13：00～17：00
場　所：真宗総合研究所東京分室
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央
目　的：今年度の秋開催のシンポジウム、及び指定研究の現地調査等の打ち合わせ

【東京分室指定研究「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究」研究会】
日　時：2022年8月23日㈫10：00～13：00
場　所：真宗総合研究所事務室ミーティングルーム
講演者：長谷暢（東本願寺沖縄別院職員・法政大学沖縄文化研究所国内研究員）・演題「沖縄別院の歴史と取組み紹介」
出席者：福島栄寿、荻翔一、陳宣聿、磯部美紀、澤﨑瑞央

個人研究　荻班
【学会・研究会参加】
◇KCCJ歴史研究会
日　時：2022年5月27日㈮
場　所：オンライン
要　務：研究会参加
参加者：荻翔一

◇「宗教と社会」学会第30回学術大会
日　時：2022年6月4日㈯～6月5日㈰
場　所：オンライン
要　務：学会参加
参加者：荻翔一

◇KCCJ歴史研究会
日　時：2022年8月19日㈮
場　所：在日韓国基督教会館
要　務：研究会参加
参加者：荻翔一

◇日本宗教学会第81回学術大会
日　時：2022年9月10日㈯～9月11日㈰
場　所：オンライン
要　務：学会参加、研究発表
参加者：荻翔一

【出張】
◇2022年4月17日㈰
出張先：在日大韓基督教会西新井教会
要　務：日曜礼拝への参加、インタビューに関する打ち合わせ
出張者：荻翔一

◇2022年5月7日㈯
出張先：在日大韓基督教会西新井教会
要　務：信者への聞き取り調査
出張者：荻翔一

◇2022年5月15日㈰
出張先：在日大韓基督教会西新井教会
要　務：日曜礼拝への参加、インタビューに関する打ち合わせ
出張者：荻翔一

◇2022年6月12日㈰
出張先：東京福音教会
要　務：日曜礼拝への参加、教会・信者の動向確認

出張者：荻翔一

◇2022 年 8 月 19 日㈮～8 月 24 日㈬
出張先：在日韓国基督教会館、猪飼野セッパラム文庫、在日大韓基督教会西宮教会、大谷大学
要　務：研究会への参加、資料収集（共同研究含む）
出張者：荻翔一

個人研究　陳班
【学会参加・研究会参加】
◇女性民俗学研究会第 720 回例会
日　時：2022 年 4 月 24 日㈰
場　所：オンライン
要　務：研究会参加、研究発表
参加者：陳宣聿

◇印度学宗教学会 2022 年度学術大会
日　時：2022 年 5 月 28 日㈯
場　所：オンライン
要　務：学会参加
参加者：陳宣聿

◇台湾民俗学国際学術研究会
日　時：2022 年 6 月 18 日㈯～6 月 19 日㈰
場　所：オンライン
要　務：学会参加
参加者：陳宣聿

◇第 6 回アジア未来会議
日　時：2022 年 8 月 27 日㈯～8 月 29 日㈪
場　所：オンライン
要　務：学会参加、研究発表
参加者：陳宣聿

◇日本宗教学会第 81 回学術大会
日　時：2022 年 9 月 9 日㈮～9 月 10 日㈯
場　所：オンライン
要　務：学会参加
参加者：陳宣聿

◇東アジア恠異学会第 138 回定例研究会
日　時：2022 年 9 月 23 日㈮
場　所：オンライン
要　務：学会参加、三尾裕子編著『台湾で日本人を祀る』の書評
参加者：陳宣聿

【出張】
◇2022 年 8 月 22 日㈪
出張先：天理参考館
要　務：第 90 回企画展の参加、資料収集
出張者：陳宣聿

◇2022 年 9 月 29 日㈭
出張先：大谷大学図書館、龍谷大学大宮キャンパス
要　務：文献資料の収集
出張者：陳宣聿

個人研究　磯部班
【学会・研究会参加】
◇関西社会学会第 73 回学術大会
日　時：2022 年 5 月 28 日㈯～5 月 29 日㈰
場　所：オンライン
要　務：学会参加
参加者：磯部美紀

◇「宗教と社会」学会第 30 回学術大会
日　時：2022 年 6 月 4 日㈯～6 月 5 日㈰
場　所：オンライン
要　務：学会参加、研究発表
出席者：磯部美紀

◇浄土真宗本願寺派総合研究所　葬送儀礼研究会
日　時：2022 年 6 月 22 日㈬
場　所：オンライン
要　務：研究発表
出席者：磯部美紀

◇「宗教と社会」学会創立 30 周年記念特別企画「修験道と社会」
日　時：2022 年 7 月 26 日㈫
場　所：オンライン
要　務：研究会参加
出席者：磯部美紀

◇日本宗教学会第 81 回学術大会
日　時：2022 年 9 月 9 日㈮～9 月 11 日㈰
場　所：オンライン
要　務：学会参加、研究発表
出席者：磯部美紀

【出張】
◇2022 年 5 月 6 日㈮
出張先：大谷大学

要　務：専門的知識の提供、資料収集
出張者：磯部美紀

◇2022年6月14日㈫
出張先：パシフィコ横浜
要　務：フューネラルビジネスフェア2022の参加
出張者：磯部美紀

◇2022年8月22日㈪
出張先：大谷大学
要　務：専門的知識の提供、科研費セミナーの参加、資料収集
出張者：磯部美紀

◇2022年9月2日㈮
出張先：東京ビックサイト
要　務：第7回エンディング産業展の参加
出張者：磯部美紀

◇2022年9月27日㈫
出張先：大谷大学
要　務：専門的知識の提供、資料収集
出張者：磯部美紀

個人研究　澤﨑班

【学会・研究会参加】

◇東海印度学仏教学会
日　時：6月25日㈯
場　所：愛知学院大学名城公園キャンパス
要　務：学会参加
出席者：澤﨑瑞央

◇真宗教学大会
日　時：7月10日㈰
場　所：真宗大谷派教務所
要　務：研究発表
出席者：澤﨑瑞央

◇東アジア仏教研究会
日　時：7月30日㈯
場　所：オンライン
要　務：研究発表
出席者：澤﨑瑞央

◇日本印度学仏教学会
日　時：9月3日㈯～4日㈰
場　所：オンライン
要　務：学会参加
出席者：澤﨑瑞央

【出張】

◇2022年5月6日㈮
出張先：大谷大学
要　務：大谷大学図書館における資料閲覧・収集
出張者：澤﨑瑞央

◇2022年6月8日㈬
出張先：愛知学院大学
要　務：立川武蔵著『仏教史』書評会参加
出張者：澤﨑瑞央

◇2022年7月8日㈮
出張先：大谷大学
要　務：高井龍先生と中西麻一子先生と敦煌学の研究会
出張者：澤﨑瑞央

◇2022年8月22日㈪
出張先：大谷大学
要　務：専門的知識の提供、資料閲覧・収集
出張者：澤﨑瑞央

■組織

□研究所委員会
江森　英世（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長）
藤元　雅文（真宗総合研究所主事）
釆睪　　晃（大学院人文学研究科長）
山内　美智（教育研究支援部事務部長）
岡田　治之（教育研究支援課長）
井上　尚実（教授）
Dash Shobha Rani（教授）
福島　栄寿（教授）
古川　哲史（教授）
三宅伸一郎（教授）
村山　保史（教授）
西本　祐攝（准教授）
本明　義樹（講師）

■人事

真宗総合研究所主事
（新）藤元　雅文　（旧）Dash Shobha Rani
（2022年4月1日付）

■東京分室 PD 研究員

□新規採用（2022 年 4 月 1 日付）

＊磯部　美紀

＊澤﨑　瑞央

□解任（2022 年 3 月 31 日付）

＊青柳　英司

＊鍾　　宜錚

■特別研究員

□新規採用（2022 年 4 月 1 日付）

＊平田　公威

現　　職：任期制助教

研究期間：2022 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

研究課題：イェルムスレウ言語論からみた 20 世紀後半フランス思想の研究

＊古川　拓磨

現　　職：任期制助教

研究期間：2022 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

研究課題：日系オーストラリア文学の可能性を考察する－第二次世界大戦時強制収容体験を中心に

＊鈴木　真太朗

現　　職：任期制助教

研究期間：2022 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

研究課題：「説得」をめぐるパスカルの思想と方法の総合的研究

＊清水　洋平

現　　職：非常勤講師

研究期間：2022 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

研究課題：タイ国で発展した積徳行文献に基づく蔵外仏典の研究

＊荻　翔一

現　　職：東京分室 PD 研究員

研究期間：2022 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

研究課題：現代における在日コリアンのキリスト教信仰に関する研究

＊磯部　美紀

現　　職：東京分室 PD 研究員

研究期間：2022 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

研究課題：個人化社会の葬儀における僧侶介在に関する宗教社会学的研究－法話に着目して－

研　究　所　報　第 81 号

2023 年 3 月 1 日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435
Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2023 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute